

## 論説 ソ連軍治顧問団と黄埔軍校：黄埔軍校の 発展その二

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 三石 善吉   |
| 雑誌名 | 筑波法政  |
| 巻   | 9   |
| ページ | 27-92   |
| 発行年 | 1986-03   |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00155713">http://hdl.handle.net/2241/00155713</a> |

# ソ連軍事顧問団と黄埔軍校

## 黄埔軍校の発展その二

三石善吉

### 目次

- 第一章 最初の顧問
- 第二章 軍校の展開
- 第三章 顧問団の拡大
- 第四章 赤軍の経験
- 第五章 ブリュッヘル戦略

## 第一章 最初の顧問

### (一) 四人の顧問

孫文とソ連との実質的な協力関係は、一九二一年二月下旬、コミンテルン、レーニンの使者H・スニーフリート（一八八三？—一九四〇）別名マーリンとの会見で、国共合作、軍校の設立といった問題として具体化されはじめ

ソ連軍事顧問団と黄埔軍校

た。<sup>①</sup>G・V・チチェーリン（一八七二—一九三六）外務人民委員（外相）は、すでにカラハン宣言の名で広く中国人民に知られているレフ・カラハン（一八八九—一九三七）人民委員代理を対中国国交回復交渉の切り札として派遣した。中国はこのとき北方の軍閥政府と孫文の南方革命政權の対峙といういわば分裂状況にあり、ソ連の外交政策は必然的に二重外交とならざるを得なかった。

A・ヨッフエをひきついで、沿途中国人民の熱烈歓迎を受けつつ一九二三年九月二日北京入りを果したカラハンは、北方政府との国交回復に努力するとともに、南方政府とも孫文を通じて友好関係を保持した。北方政府とは、孫文の不满にもかかわらず、一九二四年五月三十一日、「中俄協定」が結ばれて国交が回復し、それによって返還された北京のソ連大使館はモスクワからの指令の中継地としてソ連人顧問の中国における総指令部となるのである。他方南方政府とは、一九二三年一〇月六日にカラハンの古き友、M・M・バラディーン（一八八四—一九五二）が広州に派遣され、彼は国民党の政治顧問、国民党改組問題監査として、国民党の改組、一全大会開催にその全精力を傾注することになる。

シベリア鉄道を経由して一九二三年六月二日北京についた最初の軍事顧問全五人、Y・ゲルマン、P・スモレンチエフ、N・テレシャトフ、V・ポリヤーク、A・I・チェレパーノフのうち、まず、一九二三年九月はじめにゲルマンが広州入りし、ついで一九二三年一〇月六日にバラディーンとポリヤークが、さらに一九二四年一月二五日にテレシャトフとチェレパーノフが広州に到着した。ゲルマンとポリヤークはバラディーンを助けて一全大会の開催準備に忙殺され、軍事顧問としての活動はしていない。一全大会は一九二四年一月二〇日から広州市にて挙行され、国民党改組、三大政策（連ソ、容共、扶助農工）、中央各種委員などを決定して、一月三〇日に終わっているが、この大会の

間、一月二四日には孫文は陸軍軍官学校準備委員会を發足させ、委員長（蔣介石）と七人の委員（王柏齡ら）の名を發表した。一月二八日には黃埔島を軍校の校址と決定した。チェレパーノフの回想によれば、一全大会の直後（おそらく一月三一日）、バラディーン、テレシヤトフ、ゲルマン、ポリヤーク、チェレパーノフは、瞿秋白を通訳として、孫文主催のレセプションに招かれた。そこで孫文は、「我々の第一の任務はソ連のモデルにならって軍隊を創建し、北伐の根拠地を準備することだ」と述べ、さらに、「我々が望むことは、侵略的帝國主義者の侵略への闘い、国内の干涉主義者の驅逐におけるあなた方の豊かな経験をわが革命軍の幹部や未来の將校たちに伝えてほしい」と依頼したのである。

革命の領袖、南方政府の絶對的指導者である孫文からそのような謙虚な依頼を受けて四人の顧問たちは勇みたった。「我々には實戰的經驗も理論的知識もある」、とチェレパーノフは回想している。「我々は二度の戦争に加わり、かつ軍校での理論課程も学んでいる。従って我々は教室での士官教育のやり方のみならず、實地訓練の要所をも教える」と。チェレパーノフはツアー陸軍の兵卒からたたきあげ、大尉にまで昇ったが、一九一八年のはじめ赤軍に志願し、内戦期にはポーランド、ドイツ戦線で連隊を指揮して戦った。その後、今のフルンゼ陸軍士官学校の前身である參謀学校に学んでいる。ポリヤークもテレシヤトフも同じような経歴をたどったらしい。かくて彼ら三〇前後（チェレパーノフはこのとき二九歳）の若き軍事顧問たちは、自信と情熱と善意に燃えて「我々は中国の未来の指令官たちに戦闘教練、不斷の警戒、効率、勤勉、入念な分析といったものが軍隊ではいかに重要なことであるかをわからせようとした」のである。

一全大会で軍校の設立が決定され、一九二四年二月六日には広州市南堤に軍校準備所が設けられ、二月八日にそのソ連軍事顧問団と黃埔軍校

第一回會議がもたれたが、準備委員長の蔣介石は資金の配分をめぐる繁雑な人間関係に「ヒステリー」をおこし、任務は緒についたばかりなのにこれを放りなげ、二月二一日、さっさと故郷に帰ってしまったのである。軍校設立の総指揮は、国民党の重職を兼任する廖仲愷が、多忙にもかかわらず兼任し、黄埔島にある広東陸軍学校、海軍学校の旧校舎も四月中旬には修理が終った。蔣介石が広州に戻ってくるのは、四月二一日、この困難な準備活動がほぼ完了した時であった。この準備期に俞飛鵬（一八八四—一九六六）が軍需関係を一手にひき受け、繁雑な事務関係は朱一鳴が、軍校のカリキュラム、テキスト作りなどには王柏齡（一八八九—一九四二）が当った。王柏齡はこのとき三十四歳、保定軍校を卒業後、日本の振武学校、陸軍士官学校（第一〇期）を卒業、中国に戻って一九一七年から一九二二年まで雲南講武堂で教育長をつとめた経験をもつ。実戦の経験はなかったが、軍事知識、軍校経営にはなみなみならぬ自信をもっていた。それ故、四人のソ連軍事顧問の情熱と善意にかえって敵愾心をもやし、若造何する者ぞと思っていたふしがある。王の回想によれば、彼ら四人の「態度は高傲、言語は不遜」と述べ、蔣介石もまた「我々はなぜ革命をするのか。帝国主義の圧迫を受けてよいのか。もし我々が彼ら四人の圧迫を甘受するなら革命などやる必要もない」といったらしい。このようなソ連顧問に対する感情的反発（つまり顧問たちの権威の欠如）を軍校の教授陣の面々はいずれも共有していて、両者の関係は円滑ではなかった。しかも悪いことに四人の顧問は「中国語も英語も下手なため、技術的知識や教授陣の講義内容を検討できず、また必要とみられる改革もできなかった」のである。

そもそも顧問(advisee)とは、その卓越した専門知識にもとづく高い権威と大きな権限を併せ持つ者をいう。これを欠く者は、単に中国人に使われ給与を与えられ、その見かえりに若干の新しい外国知識を伝授する単なる「お傭い外人」にすぎない。王柏齡らはこの四人のソ連人を顧問とは認めず、「お傭い外人」とみていたのである。このこと

は早くもこの準備段階で、広州にいるバラディーンも北京なるカラハン大使も気づいていた。二人は一九二四年四月一六日、連名でモスクワに電請し「戦闘経験が豊かで、孫文に畏敬の念をおこさせる同志がグループ〔つまりソ連軍事顧問団〕を率いること」と依頼している。高い權威こそが「畏敬の念」をひきおこし、大きな権限が与えられ改善の提案も受け入れられよう。要するにチェレバーノフら四人の顧問では力量不足であったのである。四月二二日、蔣介石が広州に戻った翌日、四人のソ連人顧問は王登雲（英文秘書）を通訳として校長蔣介石に会った。四人は介石になぜ上海に帰ってしまったのかと問うたところ、介石は「君たち四人がいるからだ」といつてのけ、四人は一瞬顔面蒼白になりそうそうに退散してしまつたと王柏齡は氣持よげに回想していた。ともあれ校長蔣介石に会見したあと、四月二五日頃、ソ連顧問たちは介石や準備所の人員とともに黄埔島の新しい校舎に移った。

第一期生のうち正規生三五〇人が一九二四年五月五日に、補欠生一四九人が五月七日に黄埔の新校舎に入校してきつた。四人のソ連顧問のうち、ヤコブ・ゲルマンが政治顧問に、ポリャークとテレシャトフ、そしてチェレバーノフが軍事顧問となつた。ポリャークが主席顧問（senior adviser）となり、訓練を受けもつて王柏齡とペアを組む、テレシャトフとチェレバーノフが隊形訓練、射撃訓練、戦術訓練を受けもつて何応欽とペアを組んだ。正式に授業が始まると、ソ連軍事顧問たちは、六ヶ月という短い教育期間であることを考え、実戦的訓練に重きをおいたカリキュラムを主張した。しかしこれに対し、黄埔の中国人教授陣とりわけ王柏齡は強い抵抗を示した。顧問たちはなすすべもなく、バラディーンがたまたま軍校に來たとき、彼の權威と語学力によって直接校長蔣介石に圧力をかけてもらい要求を通そうとした。チェレバーノフによれば、「介石は自分の無知をさらけ出すのを恐れて我々の提案を受け入れた」というが、実際には施行されなかつた。軍事顧問と中国人教官との感情的対立は依然として解けなかつた。ソ連赤軍

の軍服をまとい（中国人にとけこまぬこと）、すでに決定したカリキュラムに手直しを迫るソ連顧問は、中国人にしてみれば「高傲」「不遜」以外の何者でもなかったのである。もっと大きな影響力を発揮しうる人物、すくなくとも黄埔の教官・校長を従わせうる力量・權威をもつ軍事顧問が今や早急に必要であった。

四月の電請によって、恐らく一九二四年六月下旬にパヴロフ將軍<sup>(5)</sup>が顧問団（といっても四人しかいなかったが）の団長として広州に到着し（後述）、軍校を視察して次のような評定を下した。「教室での授業と野外での訓練との関連が十分ではない。しかし軍校の政治工作は始まったばかりであるのに、国民党の細胞（これは国民党特別区党部のこと、一九二四年七月六日に正式に成立している）が作られ、文化教育工作も組織されている。これは大変素晴らしいことだ。学生たちは政治問題に生き生きとした興味をもち、校内の党活動も活発化している。黄埔軍校は今や革命政府の一つの根拠地となった」とその成果を高く評価した。パヴロフの政治工作重視の立場がよく窺えるが、しかし思うに、恐らくこれは、四人の顧問たちの功績とは言いがたい。むしろそれは、国民党政治顧問のバラディーン<sup>(6)</sup>の力、学生たちの政治意識の高さは彼ら学生たち自身の質の高さによる。そもそも学科（教室内）と術科（戸外の訓練）との関連不十分という指摘こそ、四人の顧問たちがいかに努力しても結局黄埔の校長教授陣を説得できなかったこと、つまり彼らの影響力のなさ、力量不足を示している皮肉な評語（パヴロフの意図とは別に）になっているのである。

## （二）パヴロフ將軍

一九二四年四月のバラディーンとカラハンの連名の電請で、大きな影響力を発揮しうる大物の軍事顧問が派遣され、四人の顧問のヘッドとなった。ソ連軍事顧問団初代団長、P.A. Pavlov 將軍である。パヴロフについてはチェル

バーノフ、ブラゴダトフ、アキモヴァらが言及しているが断片的なことしかわからない。

Pavel Andreievich Pavlov 一八九二年生れ。父はツァー皇帝の陸軍の中将。その息子のパヴロフは、父と同じくツァーの士官学校を卒業、社会民主党に入り、一九一〇年には逮捕されている。一九一九年共産党に入党、内戦ではウクライナ、中央アジアで師長として戦い、大いなる戦功があり、勲二等赤旗勲章を受けている。パヴロフがいつ中国（広州）に到着したのかもはっきりしない。Wilbur は「ソ連は（一九二四年）六月にパヴロフを派遣した」という。広州に着いたのは六月の下旬、軍校の開校式六月一六日には間に合わなかったと思われる。そして事故で死ぬのが七月一八日のことであるから、一ヶ月たらずの在華活動期間であった。

パヴロフ將軍の黄埔での第一声は、一九二四年六月二四日の次の講演であった。それは十分間ほどの短い演説ながら赤軍の形成とその意義について簡潔に力強く述べたものである。この日にはバラディーン、パヴロフ、そして廖仲愷党代表の講演がこの順でなされた。いまそのパヴロフの演説の全文を示そう。

将校の皆さん、同志の学生諸君、私はこれからソ連のこの度の革命と赤軍の形成の情況についてお話ししよう。この度のソ連の革命を実行した革命軍は赤軍である。しかしこのときの赤軍は決して優れた軍隊ではなかった。当時、訓練された軍隊はみなロシア皇帝の息がかかっていた。赤軍の中には、優れた兵士もなく、優れた将校もいなかったため、訓練をつみ重ねた反対党の軍隊と戦うことは不可能であった。しかもそのとき、列強はソ連の革命に反対し、一斉に派兵して我々を圧迫したのである。我々赤軍は内部の敵と戦い、かつ外部の敵をも防がねばならなかった。そのような戦いには精鋭の軍ですら勝ちぬくことはむづかしいであろう。いわんや臨時に召集された新しい軍隊においておや。



パヴロフの講演は短い時間しか与えられていないので圧縮、省略が多い。すこしく要所を補足しつつ話を迎ろう。ソ連赤軍の前身は、一九一七年二月に設けられた赤衛軍である。一九一七年のいわゆる「十月（二五日）革命」を実行した軍隊は、二〇万人のこの赤衛軍（ペトログラードやモスクワの大企業の労働者よりなる）を中心に、革命的な水兵の混成部隊、ラトヴィア人狙撃隊、そしてほんの僅かな正規軍部隊であった。この赤衛軍は一九一八年一月一五日労働者農民赤軍（略称赤軍）に改組された。すでに成功したロシア革命を護りぬくためである。内外の敵に挾撃され、絶对的な危機に陥った新生ソ連は、一九一八年三月以降、トロツキーが軍事人民委員（国防相）に就任（一九一八年三月一三日）するとともに、この赤軍に大量の旧将校を採用した。一九一八年段階で「赤軍の指揮と軍政の幹部の四分の三以上が旧政権の将校」であり、「最高指揮の幹部になるとさらにその比率は大きかった」。パヴロフは続けている。

その時の赤軍で最も実力を発揮したものは農民と都市の労働者であった。彼らは革命に情熱をもやしてはいしたが、軍事教育も訓練もまったくなく、戦闘には適さなかった。しかし、この時、革命政府は革命の目的を達成するために急遽軍隊を組織し、革命計画の進行を守らねばならなかった。赤軍が反対党と初めて戦端を開いたとき、敵の軍隊はすでに結集を終えていたが、革命党はやっと臨時に召集したばかりの農民と労働者とを前線におもむかせたのである。残念なことに、その時の将校も兵卒もまったく訓練なく、兵士をこちらに行かせようとすればあちらに行き、あちらに行かせようとすればこちらに来るといふ状況である。このような状況では革命軍の勝利はおぼつくまい。

確かにトロツキーもいうように、一九一八年夏、「エスエルとその他の白軍によっておこされたヴォルガにおける

チエコスロバキア軍団の反乱」をむかえうつ革命側の軍隊の「抵抗力は零に等し」かった。兵士は「多数の浮浪者、動揺分子」に満されていた。一九一八年八月革命政府はこの事態を改善するために、コミュニストの大衆的動員、政治指導と政治教育の中央集権化のほか、さらに労働者と農民の動員が行われた。しかしこの労働者、農民は「地方バルチザン部隊の域を出ず」、戦争が拡大するにつれてかえって足手まといにすらなった。旧将校もまた新時代を理解するものすくなく、創造性をもたぬ反革命活動家が多かった。今や将校にも兵士にも「組織と規律」が何よりも必須であった。トロツキーはこの軟弱な軍隊に、一方では革命精神に燃えたコミッサール (Commissar, 代表者、委員の意、党代表とも政治委員とも訳されている) を各隊長につけて監視させ、他方では命令なくして退却したコミッサールと隊長を射殺するとの威嚇で臨んだ。パヴロフは続けている。

革命党はこういった状況を見、心血の限りを尽して、この絶望的状况の中で真剣に軍隊を組織していった。そのときの軍隊の訓練方法はおよそ次のようであった。

一、「人員」を各軍に派遣して宣伝させ、下士官たちになぜ戦うのか、なぜ生命すら犠牲にしなければならないのか理解させる。

二、革命党は「代表」を各軍に派遣し、革命の目的は何か、なぜ革命党は革命軍の組織を持つべきなのかを宣伝させる。すべての人々に、直ちに党の指揮を受け入れよ、これは軍規に服従することよりも更に厳しくあるべきだ、と党規律の重要性を理解させる。

三、陸軍〔士官〕学校を開いて、軍事の人材を造り出し、革命軍に「党代表」の指揮を受けさせるほか、更に知識ある士官に軍隊を監督させる。

もし我々がロシアの革命史をひもといて見るなら、陸軍〔士官〕学校の学生の、革命に対する貢献が極めて大きいことがわからう。この学校の生徒は、卒業後防衛戦に出陣したのみならず、敵がペテルブルク要塞に迫ったとき、彼らは何と敵軍を感化させ、敵軍の思想を変えてわが党に味方させてしまったのである。彼らの革命精神のほどが理解できよう。

パヴロフが軍隊訓練の三方法として述べたものは、いずれもコミッサール制のことである。急いで臨時に召集された農民労働者、そして軍事の専門家ではあるがいつ寝返るかわからぬ將軍將校たち、この頼りない二つの力で内部の敵と外部の敵を同時に防がねばならぬという絶望的狀況において、革命政府はフランス革命の遺産コミッサール制を導入した。トロツキーはいう、「コミッサールの任務は隊長の純軍事的活動を拘束することなく」、隊長の權威を革命の利益の方面に向けさせることである。コミッサール制そのものはフランス革命に先例が見られるし、ツアーをひきついだケレンスキーも軍つきのコミッサールを任命していた。だがそれまでコミッサールはただ最高指揮官だけにつけられていて、その役目もあいまいなものだった。そこで「トロツキーは中隊長から総司令官にいたるまで軍のあらゆる段階にコミッサールたちを配置した。」「そして前者〔指揮官〕は部隊の軍事的訓練や作戦行動に責任があり、後者〔コミッサール〕には指揮官の忠誠な行為や部隊の士氣に責任があるものとした。この両者が署名しなければ、どんな軍事命令も有効でないとした。」「摩擦はまぬがれなかったものの、大体この組織はうまくいった。統制されない旧將校たちに率いられていては、赤軍は政治的に崩壊していただろう。また素人のボルシェヴィキが指揮していたのでは、赤軍は戦場で破滅していただろう」。中国国民党がこのコミッサール（党代表）制を導入したのは、一九二四年五月九日一期生の入校直後、廖仲愷を「陸軍軍官学校中国国民党代表」に任命したのにはじまる（これは明らかにバ

ラディーンの建議によるものである。翌五月一〇日には軍校の人員採用に当って佐官以上は校長と党代表の連署が必要と決議した。パヴロフの演説は最後の部分に進む。

赤軍は上に述べたすばらしい方法と人材を得て、一日ごとに、一と月ごとに、一年ごとにますます健全に、ますます強大になっていった。国内の反革命派を打破したのみならず、外国の反革命軍と戦いうる力量を持つに至った。外国の侵略軍は我々を破ることができず、運んできた機関銃や大砲と子どもも撤退した。ふりかえてみれば、今日の赤軍もかつては全く訓練なき旧き軍隊であった。まったく興味深いことに諸君と我々は同じ条件なのだ。

一九一七年三月一五日、ニコライ二世が退位してロマノフ王朝が亡び、これをケレンスキー臨時政府が受け継ぎ、いわゆる一〇月革命を迎える。革命成功後、レーニンらは一九一七年三月のコミンテルン第一回大会から一九二〇年七月の第二回大会に至る間、ポーランド革命からドイツ革命へ、そしてヨーロッパの全般的な革命へと転化するとみていた。他方、レーニンの新生政府はコルチャック軍などの内部の敵、列強の干渉軍との苦闘を経て一九二二年一月三〇日、正式にソ連邦を成立させた。この立役者はトロツキーに率いられた赤軍の果敢な戦闘力であった。パヴロフは祖国の勝利と中国革命とを二重写しにみて、その一致性に打たれた。かつてのガタガタの赤軍の、今やすばらしい健強な軍への大変貌をここ中国の革命に見ようとしている。しかもパヴロフはこの大変貌の鍵こそ、コミッサール制だとみている。コミッサール制こそ、名目的には連合しているが、実質的には地方軍閥に分断されている軍隊を国家的に一つに統合された軍隊に改変しうる鍵なのである。かくてパヴロフとバラディーンは、まず七月一日、バラディーンを高等顧問とする政治委員会（中央政治会議）を発足させた（委員は胡漢民、汪兆銘、廖仲愷、伍朝枢、譚

平山、邵元沖の六人、孫文が主席で、バラディーンが高等顧問である。この日、七月一日、大本營で第一回の政治委員会が開かれ、パヴロフを顧問とする軍事委員会<sup>6</sup>（パヴロフの提案になる）を発足させた。委員は許崇智、楊希閔、劉震寰、譚延闓、樊鍾秀、胡漢民、廖仲愷、伍朝枢、そして軍校々長蔣介石である。パヴロフの意図によれば、この軍事委員会は軍の再編と国防問題を実行するためのもので、やがては、全体的戦略計画をねる軍の最高決議機関となるべきものであった。パヴロフはこの会議のプログラムを次のように規定した。

一、①同盟軍「南方政府を支える各軍閥のこと」の中に政治部を作り、各隊、各師団に senior party officials「党代表のこと」を派遣する。

②軍事政治人員を訓練する短期訓練コースを軍校に設立する。

③軍隊内で広汎な宣伝工作を行ない、戦闘の目的を説明する。特に対陳炯明戦の重要性に注意させる。

④各軍の全ての政治工作に対する指揮監督を、本軍事委員も加わる国民党中央執行委員会にゆだねる。

二、①全同盟軍の指揮官の統一訓練を行なうこと、そのために各軍の軍事学校を査察し、三ヶ月の将校再訓練学校を作る。この学校の主要目的は政治教育と国内戦争の状況にみあった戦術方針を統一化することである。

②一定の計画に従って既存の軍事学校の組織網を拡大すること。

③一小隊を各同盟軍から派遣させて集中訓練を行なう。

三、ソ連の内戦時の、赤軍の戦線に沿って作られた防衛区のように、広州市防衛区を作る。防衛には広州市の全ての物資を投入する。

四、装甲兵部隊を作る。

五、敵軍の後方において広汎な農民運動を組織する。

六、軍事検閲制度〔演習成果の確認など〕を創設する。

みられる通り、パヴロフの計画は既に見た彼の短い講演の主旨を敷衍したものである。つまり、①コミッサール制度の導入による将兵の政治意識・目的意識の強化、②軍規訓練の統一化（これは雑多な客軍の寄せ集めを、いわば国軍化する一つの方法である）、この二点を中心としてさらに、③根拠地広州の防衛、④農民運動の組織化（これはやがて彭湃、毛沢東によって実行に移される）の二策が中国の状況にかんがみて付加された。特に④は、バラディーン（？）の顧問をつとめる農務調査委員会（一九二四年七月一日成立）の委員に彭湃が加わっていることから理解できるように、バラディーン（？）の発案になるもので、以後、中国革命の基本的戦略となるものである。

ソ連軍事顧問の影響力は、これまで黄埔軍校内にすら及ばなかったが、パヴロフの来粵とともに、直ちに南方政府全体にその影響があらわれてきた。一九二四年七月一五日の第一回軍事委員会でパヴロフの提案はすべて受け入れられた。『国父年譜』の一九二四年七月一五日の条には、蒋介石を委員長とする各軍々事訓練準備委員会と汪兆銘を委員長とする各軍政治訓練準備委員会の発足を伝える文がある。パヴロフの提案は早くも動きはじめたのである。そして翌七月一六日、第一回中央執行委員会第三次全体会議が開かれ、各種の謠言を否定し、国民党は三民主義に法るとを宣明しつつ（後に詳述されようが、国民党と共産党の確執も顕在化しはじめ、一九二四年六月一八日、二五日に鄧沢如、謝持、張繼らの共産党弾劾がなされ、この会議で国民党の共産化を否定した）、同時にパヴロフの提案、党代表の権限（？）についての訓令を発表した。それは、

①軍校及び軍隊内のすべての命令は、党代表の副署によって、校長あるいは当該官長が執行する。軍中の党の決議

も、その執行は同様の手順による。

②すべての一切の軍校及び軍隊中の法令規則は、党代表の副署によって完全に有効となる（副署なきものは、よって、無効となる）。

パヴロフこそが黄埔軍校の、いなか大革命期の中国革命政府の迎るべき路線をいち早く規定したといえるが、実際にはやや時期尚早ではあった。政治訓練には「必要な、訓練を受けた人員がいなかった」（政治訓練班が設けられたのは、一九二四年一月一日のこと、但しすぐ実行されなかった）。軍事訓練については、客軍の領袖たちは黄埔軍校と黄埔なるソ連人顧問を歯牙にもかけず、いまそこから生まれようとしている新しい軍隊の将来性を見ぬけず、これを「孫文の気まぐれ<sup>(8)</sup>」とみていた。のみならず、党代表制も直ちに導入されなかった。

チェレパーノフは、このパヴロフ在任中の一九二四年七月半ばの段階までに新しく着任した顧問として、Ugar (Remi), Sakhnovsky (Nilov), Chubareva (Sakhnovskaya), Shalfeyev (Vorobyov), Brailovsky (Aitkin), Shevaldin (Pribylev) の六名の名をあげている。従ってこの段階でソ連軍事顧問はパヴロフを頂点として、既に来華しているチェレパーノフら三人を加えて、一〇人ほどとなったわけである。（パヴロフの到着とほぼ入れ違いに、V・ポリャークが帰国した。本国で妻が幼い子供を残して急死したのである）。チェレパーノフが先任ということで、主席顧問となった。チェレパーノフによれば、このパヴロフ在任中のことと思われるが、軍校での教育でソ連式教育を導入しようとしている。チェレパーノフの回想に次のような文がある。教室での講義は無益であるから実地での演習を重視させよと提案しつつ、

中国のこれまでの執銃教練や教練典範はソ連のものと違っていたが、無益な混乱をおこさないように、我々はそ

の違いを余り気にしなかった。戦術訓練（戦闘、偵察、観察）と射撃訓練は、初歩的な武器しかないことを考慮に入れて、ソ連式の操典にならって学生たちに教えた、

とある。ここでチェレパーノフが言わんとすることは、戦術と射撃の訓練は、銃と二丁の機関銃、一門の大砲しか配置されていない中国の連隊の実情に合わせて、極めて実戦的な訓練を行わんとした、この実戦性こそがソ連式操典の本質だ、というにある。従ってこの段階で日本陸士の操典類がソ連式の操典に変えられたということを言うものではないようである。さらにチェレパーノフは、

戦術の学科では、味方の軍の規模がどうあろうと敵を断乎側面包囲しつつ、火力の援護によって迅速な攻撃を行なうべきこと、防禦の授業では、味方が最大の機動力をもち、敵の攻撃の機先を味方の反攻でもって制すべきことを教えるとした、

という。これも日本の操典の改変ではなく、むしろ、戦闘の勝利を導くための技術の伝授に重点を置く教え方をしようとしたのにすぎないと思われる。パブロフの影響力がいかに大きくとも、ソ連軍事顧問の熱意がいかに大きかろうと、この時点ではまだチェレパーノフもいうように、顧問たちと教授陣との溝は依然として厳しく存在していたようである。操典類の改訂も行なわれていないとみられる。従って、ソ連顧問たちは自分たちの威信を示しうる実際の戦闘をまち望んだ。実戦なら必ずや自分たちの優秀性を中国人に示せようと確信していた。実戦でソ連顧問の指導の優秀性が示せたなら、それを直ちにカリキュラムにテキストに操典類に反映させよう。実戦にはやっていたのは、次のべるように、孫文だけではなかったのである。

孫文は北伐にはやっていた。譚延闓と程潜の軍（いずれも湖南出身の兵士よりなる）、雲南の朱培德軍で漢口、南



昌を奪取しようというのである。とはいえ孫文は同時に広東なる陳炯明軍を撃破しなければ北伐は不可能ということも知っていた。しかも客軍のうち、湘軍、予軍が北伐によって故郷に帰れることを望み、他の軍閥の領袖らは財源たる広東をはなれる気はなかった。

パヴロフは孫文の北伐（最終的には呉佩孚の撃破）を時期尚早とみていた。しかし部下のテレシャトフを漢口に送って呉佩孚軍の動静を探らせ、その間パヴロフは陳炯明軍の動向視察のため、自ら前線の石龍におもむいた。そこで「ばかばかしい・悲劇的出来事」がおきたのである。パヴロフはボートから軍艦に移るとき、足をすべらせて溺死してしまったのである。一九二四年七月一八日のことである。パヴロフの戦友がブラゴダトフ（Bagodotov）に語ったことによれば、一九二一年五月、パヴロフがたった二、三フィートの小川を跳び超えようとしたとき、彼はいたく緊張し、顔面蒼白、水面をみつめたまま、ありありと恐怖の状をあらわしていたという。それ以外のことでは勇敢無比の戦士であったが、彼は水恐怖症であったというのである。

孫文はパヴロフの死に驚き、一九二四年七月二三日、その埋葬式に当ってソヴィエト政府に次のような弔電を送った。

衷心よりパヴロフ將軍の死をいたむ。將軍の死は中国の自由を求める戦いで、ロシア人として最初の犠牲者であった。わが隣国の勇敢にして高貴な子息は有意義な死をとげた。將軍はソ連と中国をしっかりと結びつけ、民族自決の戦いに勝ちぬこうとする国民党の不屈の決断を強化した。

翌月八月四日、黄埔軍校は総理孫文を主祭者として、パヴロフ、病没した黄埔一期生の二人、毛宜、吳秉礼の追悼会を開き、孫文は次のようにのべた。

勇敢で、優れた歴戦の英雄パヴロフは、人類のために働らく天性の奇才であった。彼は広州に一人の戦士として、一人の学者として、中国を助けにやってきた。彼は彼の天与の才を十分に示す数々のプランを提出した。しかし思わざる悲劇が彼の尊い生命を奪った。

孫文は若くして散ったこの三人に「何という無念（遺恨如何）」の四字を記念にとどめた。パヴロフ三十二歳、毛宜、呉秉礼はおそらく二十歳前後であった。

## 第二章 軍校の展開

### (一) 軍校の拡大

一九二四年七月一八日のパヴロフの死から、一九二四年一〇月末にB・K・ブリュッヘル（中国名はガリン）將軍が到着する間、やや規模を拡大したソ連軍事顧問団は、同じくともに拡大しつつあった黄埔軍校に、次第にその影響力を発揮しはじめた。ここではまずブリュッヘル將軍と顧問団の動向にふれる前に、軍校の発展状況<sup>(10)</sup>をみておこう。

第一期生は一九二四年五月五日と五月七日に入校、五月末までの予備教育を受け、六月から六ヶ月間の正式訓練に入った。一期生の学科、術科は、いずれも、日本陸士を範とし、それを実戦向きの短期間学習用に改変したものであった。一期生は二四年八月一〇月の商団事件に遭遇するも、二、三期生に比べれば比較的平穏な学習を続け、二四年一月八日に卒業試験（実習）、一月三〇日に卒業式を迎え（正式の卒業式、卒業証書授与は一九二五年五月二〇日に梅県で行なっている）、この日（一月三〇日）校長蔣介石は全体の学生（一期、二期生）に、「士官、学生は生死

の関頭を打破し、自ら苦難に耐え、兵卒を輕視するな、要するに患難を共にする精神で指導していけ」と訓じた。卒業生四百六十五名（第六隊の陸軍講武学校からの移行組は一九二五年二月卒業なのでこの中には入っていない）は、見習い少尉として各部隊、教導団などの指揮官や党代表あるいは又、周恩來の政治部に王逸常、楊其綱、洪劍英などが配属されたごとく、軍校の各部署にも散っていったのである。

第二期生も一期生と同じく上海、広州で募集された。まず一九二四年八月二八日に学生第五隊（陳復が隊長）と工兵隊（教官王俊が隊長）が成立した。ついで順次採用した学生をまとめ、一〇月二四日に砲兵隊が成立した。十一月六日に輜重隊が、十一月二七日に憲兵隊が、一九二五年一月一〇日には学生第七隊が成立した。つまり学生定員数をあらかじめ決めて採用したのではなく、順次、上海、広州に集まってきた学生を試験でふるいわけつつ、八月、一〇月、十一月、翌一月の四回に分け、兵科別に採用編成したのであった。例えば、工兵科は一九二四年七月一三日に百八十名の募集を広告し、七月二〇日をメ切りとした。上海で九〇名、広州で九〇名をとり、八月一〇日に授業開始の予定となっていた（実際には八月二八日に成立したこと前述の通りである）。二期生の入学にともない校舎が手ぎまとなり、黄埔本校の近くの広東海軍学校の旧地に増築（当時これを分校と称した）、さらに黄埔島の平岡と蚶蜆岡にも増築（それぞれ平岡分校などと称した）、さらに黄埔島では狭くなり、一九二四年一月二七日広州市北較場の陸軍講武学校に工砲輜と第六隊が移った。教練部と管理部も一月三〇日ここに移転した（省分校と称した）。第二期生も元来は六ヶ月の教育期間の予定であったが、一九二五年二月、まだ在学中のまま、校軍に従って第一次東征に参加し、潮汕を平定してのちほぼ一ヶ月間、潮州分校にて主要科目の学習を続け、さらに「楊劉之役」が介在して学習は中断され、戦後二ヶ月間、學術兩科を修めてようやく全課程を終えた。この第二期生はかく戦火の介入により修学期間は

ほぼ一年間にのび、卒業試験は一九二五年八月二日、卒業式は同年九月六日に行なわれている。卒業者は全四百九十九名（うち広東百七名、湖南七十五名、浙江六十六名、江西五十二名、四川四十九名など）である。

さて、この一、二期生が一九二四年内でもに経験した重大事件を時系列的に列挙してみると、

① バラーフスキー号とブルュッヘル將軍の広州到着（一〇月七日と一〇月末）

② 商団事件における市街戦（一〇月一五日）

③ 孫文の北上と軍校での別れ（一一月一三日）

④ 教導団の成立（一一月二〇日）

などである。軍校とソ連の關係という本論の主題からやや離れる事件もあるが、軍校の發展、展開という観点からすればふれない訳にはいかない。

## （二）教導団の成立

黄埔軍校は少尉中尉といった下級將校の養成、革命と救国の精神に燃えたその將校たちを新しく募集された兵卒たちにつけて強固な軍隊を作りあげようとするものである。必要なのは、この士官たちが指導すべき兵卒である。かく、黄埔軍校当局は一方では將來士官となる人材の募集、他方では兵卒の募集も行なわねばならなかった。黄埔当局は一九二四年七月、一期生の正式訓練が始まったばかりの段階において、やがてこの一期生が卒業して指導することになる新兵の募集に動きだした。この七月、上海の法租界、新開河の泰新旅館を本拠地（ここに新兵を集め更に広州に送る）として、陳果夫（かつての蔣介石の上官である陳其美の弟）が募集の責任者に任命された。陳の下に二人の人員が配置された。兵卒は台州、紹興、金華、奉化（介石の故郷）といった浙江省が中心であったが、のちには江

蘇、安徽省へと拡大された。陳果夫の回想録では「一三年底」（一九二四年末）、「黃埔第一第二兩教導隊」のために兵士を集めたとあるが、「一三年底」ではなくてもっと早い時期、すでにのべたように一九二四年七月のことである。この新しく出来るであろう軍隊を陳果夫は「教導隊」と呼んだが、正式には「教導団」といった。八月一九日に蔣介石校長は教導団の編成についての意見書を国民党中央執行委員会に提出しているがその詳細はわからない。ともあれこの教導団（二団編成された）が党軍へ、さらに国民革命軍へと拡大していくその出発点に当る。孫文の革命政府は、信頼しうる、革命精神に燃えた軍隊を作るべく、九月三日には何応欽に教導団創立の準備にとりかからせた。

この間、陳果夫らは各地から兵を集め、あるときは数百人あるときは数十人と広州に送った。勿論、兵は軍閥にとっては自己の勢力の大きさを示すバロメーターであるから、黃埔軍校が募集の対象とした江蘇地区の軍閥は極端にこれを嫌った。孫文が江蘇地区を支配する友軍の軍閥盧永祥に打電し募兵援助を要請すると、彼は表面的には承諾するも、裏面では秘かに妨害し、苦心して集めた兵たちを奪い取りさえしたのであった。反直隸で同盟する友軍すらそうであるから、齊燮元の如き敵対する軍閥はなおさらである。そのほか募集委員たちは、その地の憲兵、捕役、包探、流氓にも、集めてきた兵士たちを奪われぬよう留意しなければならなかった。のみならず、こうして江蘇で苦心して募集し広州に到着したとて、まだ安心できない。毛思誠が伝えるところによれば、一九二四年十一月一日、上海から送られて来た新兵九十七名が、革命政府を支える雲南軍總司令楊希閔下の胡思舜（第三軍軍長）に奪われ、校長の抗議で、十一月八日、たった三十二人が返還されただけであった（兵士一人を募集するのに平均二〇元ほどかかったという）。陳果夫らは「道路工駐滬弁事処」のカモフラージュの看板をかかげ募集に努めた。第一期生の卒業が間近となると、募兵も加速しなければならぬ。既存の三人の募兵委員に加えて、更に一〇月一日黃埔軍校から陸福廷

胡公冕、王懋功の如き教官が兵員募集のため上海に派遣された。この時点で募兵五千人を目標としていたが、これはいささか誇大にすぎたようだ。ともあれ上海からかく少しずつ送られてくる兵士を編成して、一〇月三日に教導団の第一營が成立した。沈応時が營長となって虎門で訓練を開始した。教導団は三營より成り、一營は三連、一連は三排、一排は三班の編成がとられた。いわゆる「三三制」である。このとき黃埔一期生はまだ卒業していない。そこで九月一九日にはこの教導団の第一營を指導する下級士官を百名急遽採用している（湘軍から六十八名採用）。原則として一連に兵士一〇八名、これに士官が一五〜二〇名が配属されたようだ。従って、一〇月三日に成立した教導団第一營は兵士三二四人、これに四五〜六〇人の下級士官が配置されたとみてよい。

この教導団の兵士にはどのような人々がなったのだろうか。近代工業が未発達な中国にあっては、それは農村から析出された過剰労働力であった。陳果夫によれば、「徐州から来た新兵が最も良質であった。というのもそのすくなからざる者がまだ弁髪をつけた根っからの農民」であったからという。それに対して温州出身の者はよく騒ぎをおこして良くない、上海から来た者は失業した浙江人が多かったという。『棉湖戦役四十週年紀念特刊』なる書物には、この教導団に一兵卒として参加した唐雲彪なる人物の自述がある。彼は浙江寧波の人、一九〇一年生まれ。一九二四年、このとき上海の郵政総局で郵務を実習していた。この年の九月、陳果夫が新兵を募集しているとのニュースをきき、革命に身を投じた。船で広州に送られ、黃埔で教導第一団に編入されたという。この教導団団長に何応欽が就く。一九二四年一〇月一四日商団事件が最終の頂点を迎えようとするとき、毛思誠の書の一四日の条に「軍校第二、三隊、広州市へ出発。教導第一營を虎門要塞司令陳肇英の指揮下に置く」とある。これは黃埔軍校第一期の第二、第三隊が商団との市街戦に参加すべく出発したこと、成立したばかりの教導団第一營が訓練地である虎門（黃埔

島の下流、珠江河口）の要塞司令の指導下におかれて、黄埔島の守りについたことを示している。

商團事件の直後、一九二四年一〇月一九日には第一期生は実質的に卒業して、見習将校としてこの教導団に配属されることになる。さてその教導団の第一団に三つの營（第一第二第三營）が成立して教導第一団が完成する。一期生卒業の翌日、一九二四年一月二〇日のことである。二月二七日には教導第二団が、同じく三營をもって成立し、教導団はすべて完了完成することになる。ここに第一期生の多くが配属される。教導団の編成は既に述べたように「三三制」をとった。従って原則として一班に一二人の兵士、一排に三十六人、一連に一〇八人、一營に三二四人、一団には九七二人の兵士が属した。そして一營には四〇〜六〇人ほどの士官が配属されたようであるから、一団には一八〇名ほど、兩団合わせて三六〇人ほどの士官数となろう。一期生の卒業試験を終えて合格卒業した者四六五人であるから、半数以上がこの教導団に配属されたことになる。連をとってみると一〇八人ほどの兵士に、連長、党代表、副連長、排長、副排長、特務長、文書上士、軍械上士など一五―二〇人の士官がついた。ソ連の新しい組織、訓練方法の導入はこの教導団に顕著に見られた。その最も著名なものが党代表制（コミッサール制）であるが、これについては後に詳述しよう。その前提として、以下では、再び時を溯及して、まずソ連からの最初の武器援助ヴァラーフスキー号の到着、それにもなう中ソ関係の濃化にふれておこう。

### 第三章 顧問団の拡大

#### (一) ヴァラーフスキー号<sup>(13)</sup>

北方軍閥政府は一九二〇年九月二〇日、ソ連の内乱を理由に新生ソ連との国交を断った。カラハンの努力で国交の回復するのが一九二四年五月三十一日、中ソ協定が締結されたものの、ソ連大使館そのものの返還が遅れ（一九二四年九月のこと）、中国への実質的援助もそれによって遅延した。最初の援助物資到着の報が入ったとき、孫文は一九二四年一〇月三日のことであるが、黄埔軍校校長蔣介石に次のような指示を与えた。「廖仲愷は武器を秘かに金星門港に陸揚げしたいというのが私は反対だ。金星門は対岸の冷汀関から常に監視され、しかもそこは浅瀬だ。金星門から黄埔に運ぶにも時化や盗賊の危険もある。黄埔に公然と荷揚げするのが一番良い。もしイギリスが干渉してきたら、二度目以降はだめかも知れないが、すくなくとも今回の分は手に入れることができる。干渉なくば将来も安心であろう。もし金星門におろして干渉されれば、今回の分も入手できまい」と。孫文の恐れたイギリスの干渉もなく、ソ連船ヴァラーフスキー号は一〇月七日の夕刻、黄埔軍校の正面波止場に投錨した。孫文は韶関から「ソ連船を歓迎する祝詞」を打ち（一〇月八日）、帝国主義の打倒・弱小民族の解放を使命とするソ連と三民主義による中国革命をめざす両国の提携は、大同をめざす世界の福であるとのべた。さてこのヴァラーフスキー号は三つの任務を持っていた。一つは言うまでもなく本来の任務、乗員の訓練である。オデッサを出港して南まわりで広州についたソ連海軍の訓練艦であるヴァラーフスキー号には、たとえば二〇年後、ソ連の連合艦隊を率いることになるユマシェフ (Yumashev) 提督など第二次大戦で勇名を馳せることになるソ連海軍の逸材たちを乗せていた。第二の任務は孫文らの大いに期待し



ていた援助武器の輸送である。この武器は孫文の大本營がソ連に発注してあったもので、山砲、野砲、歩兵銃、ピストル、重機関銃とそれぞれの弾薬であった。その数量は不明であるが、王柏齡と宋希濂によれば、日本三八式歩兵銃八千丁、野砲・山砲二、三〇門、重機関銃数百丁、ピストル一〇丁、それぞれ一丁につき五百発の実弾および通信機などであったという。王柏齡ら黃埔の師弟たちは、クレーンでおろされてくる箱詰めの武器を、臨時の人夫となつて、荷揚げした。この武器は商団の鎮庄と新たに編成されることになる教導団にとって大きな働きをなすであらう。

第三の任務はこの船がオデッサから新しい第三陣とでもいふべきソ連の軍事顧問を運んできたことである。チェレバーノフの回想によれば次の九人である。T.A. Beschastnov, G.I. Gilev, M.Ya. Gmira, P. Zenek, Pallo, Zilbert, F.G. Matselik, V.P. Rogachev, V.A. Stepanov そのほかアキモヴァの回想では黃埔の海軍局のヘッドとなるP.I. Smirnov もこのヴァラーフスキー号で到着したとみられる。

ヴァラーフスキー号が来粵した一九二四年一〇月七日は、一方では広州の商人層との武器返還をめぐる問題で対立が激化し、他方では孫文は韶関にあって北伐に傾注している時であった。そして一〇月一五日商団との市街戦が黃埔学生の最初の実戦であつたといわれている。<sup>(14)</sup>しかしこの戦鬪に黃埔の学生がどのように加わつたか、実は余り詳らかではないのである。チェレバーノフによれば、一〇月一四日、蔣介石が政府の全軍事権を与えられ、広州市東関に設けられた臨時の軍指令本部・革命委員会の本部でもある惠州會館に移ったとき、パヴロフ亡くブリュッヘル未到着の間願問団の主席をつとめていたチェレバーノフに、黃埔島と軍校の守備の全権を与えられたという。作戰本部である惠州會館には軍校一期生の第二、第三隊全二四六人が護衛のために配置され、軍校の守りには第四隊と入学したばかりの第二期生が當つた。チェレバーノフは一四人から成る機関銃隊を一隊、砲兵中隊を二隊、歩兵中隊を編成し、機関銃、

旧式の野砲二門、日本の有坂式の山砲二門の武器で島を守り、周辺の水域には中山艦を巡回させた。また停泊中のヴァラーフスキー号には政府の重要物件が万が一をを考えて積み込まれた（ヴァラーフスキー号の存在はホンコンなるイギリスに無言の威圧を与えたようだ）。チェレバーノフは黄埔の二、三隊が戦闘に参加したかどうか伝えていない。ただ警衛軍をひきいた呉鉄城の回憶録に、一五日昼頃、警衛軍が西関に突入したとき「黄埔学生軍も亦来りて会合す」とあった。作戰本部の護衛隊が本務を離れて警衛軍とともに戦闘に参加したと呉鉄城はいうのである。『広東扣械潮』なる商団側の文献によれば、機関銃、大砲、飛行機による炸烈弾の投下、海からの戦艦の援護といった政府側の圧倒的な火力のまえに、旧式武器、瓦、レンガ、石、煮えたぎるオカユ、鉄三角などを武器とする商団側は完膚なきまでに打ち破られ、繁華を極めた西関は放火と掠奪にさらされて烏有に帰し、その中でも李福林軍の掠奪、放火、残虐は目をおおうものがあり、ついで呉鉄城の警衛軍、そして粵軍といずれも粵籍の軍隊であったという。『広東扣械潮』には黄埔学生軍の名は出てこないが、もし呉鉄城のいうように学生軍と警衛軍が合流して共闘したとするなら、学生軍も呉軍ともに掠奪残虐行為を行なったのであろうか。この戦いはその名誉ある戦いではなかったのではあるまいか。ところで黄埔一期生の第一隊はどうしたのであろうか。彼らは一九二四年九月一二日文素松少佐に率いられ孫文の大本営の衛兵として韶関に向かい、一〇月七日には学生の「眩課久しく、かつ、病に患る者多」きが故に帰校させようとするが、実際には、徐向前、宋希濂らの回憶によれば、一〇月三〇日、はじめて孫文と供に広州に戻っている。彼らは孫文の大本営（これは韶関駅にとめた特別列車内に置かれたようだ）の警護に当る一方、現地での実地訓練もやり、蚊と病氣と戦ったのであって、商団軍と戦ってはいない。

## (二) ブリュックヘル將軍の到着と孫文の北上

ブリュックヘル將軍は一九二四年一〇月末、おそらくヤコフレフ (Ye.A. Yakovlev) をともなつて広州入りし、パヴロフをついで南中国軍事顧問団の団長となつた。このとき軍事顧問は既にいた一〇名とヴァラーフスキー号で新着した一〇名、全部で二二、三名ほどであろう (ほかに顧問の妻子供もいた。アキモヴァの回想録に詳しい)。ソ連軍事顧問団はこうしてブリュックヘル將軍をむかえて名実ともに充実していくのである。

Vasily Konstantinovich Blykher (1889~1938)<sup>(15)</sup> はリュビンスク (ヴォルガ上流の都市) 近くの貧農の子として生まれた。一九〇四年ペテルブルクの呉服屋の徒弟をふりだしに工場の職工を転々としつつ革命思想の洗礼を受け、一九一〇年二月、スト煽動の罪で逮捕された (二年八ヶ月の禁錮)。第一次大戦で召集を受け、戦場において勇敢無比、ゲオルギー十字勲章をさずかるも重傷を負い (一五年一月)、一年間の療養生活、一九一六年共産党に入党、一九一七年一二月末、赤衛軍部隊の代表となり、以後、赤軍に勤務する。彼は内戦期の戦功で四ヶの赤旗勲章をうけた数すくない人々の一人であつた。彼には、カラハンやチェレパノフのように、軍人の決断と政治家の柔軟性があり、蔣介石すら彼を「最も優秀なロシア人将校で情理兼ね備えた良き友人」と絶賛したものである。

ブリュックヘルが広州に到着したとき、軍事顧問たちは誰も彼と面識がなかったようである。互に自己紹介が終つたあと、將軍はいきなり次のように質問して軍事顧問たちを驚かせた。

「一人の士官を育てあげるのに、いくらかかるのですか」。誰も答えられなかった。將軍は言葉をついで、「軍校建設のときドクター孫は資金も武器も欠如していたということをよく知っていなければならぬ。現在の問題点は軍校の拡大である。更にこれから資金がどれほど必要なのか、我々は中国軍人たちの言葉に頼る訳であるが、自分でも計

算できなければならぬ。我々顧問は、軍校の、連隊の、あるいはもっと大きな部隊の経済状況を知らなければならぬ。さもなくば我々のアドヴァイスは役に立たないだろう」。つまり將軍は狭い軍事スペシャリストではなくて、マルクス主義の原則をしつかとふまえたゼネラリストたることを要求したのである。

ついでブリュッヘルは一月に入つて軍校を視察し、「軍校はその存在を証明したといえよう。本校は他の学校よりも高い政治意識をもち、理論的実践的によく訓練された將校を生み出している。本校こ其他校の模範として役に立つ」と評価した。

彼はまた到着したばかりの広東の状況を次のように分析した。「私が一〇月の末広東に到着したとき、広東の状況は商団軍への勝利と呉佩孚・曹錕の敗北によつて生じた北方の変化とによつて確定されていた。商団軍への勝利は、武装せる商人たちの反政府的部分の、広東への直接的脅威を除去し、商人たちの指導部と陳廉伯の潰走とはその組織的凝集力を破壊した」。かくて、ここ、広東に限つていえば、商団事件後革命勢力の地位強化によつて、相対的安定期が生まれたように見えた。しかしこの安定性なるものはすぐ崩れた。南方政府の領袖孫文がブリュッヘルとはば時を同じくして韶関から広州に九月以来始めて戻つてくると、その日のうちに（二〇月三〇日）、大本營に會議を召集し、北方政変を理由に自分孫文の北上を確認させてしまったのである。他方ブリュッヘルのもとに、孫文の宿敵陳炯明が汕頭に軍事會議を開き広州攻撃を決定、のみならず鎮圧された広州商団が再び蠢動を開始し、陳炯明と結んだとの情報が入つたのである。

ところで孫文の北上を促した北方政変とは何か。一九二四年九月五日、孫文は粵（孫の南方政府）、奉（張作霖、浙（段祺瑞・盧永祥）による反直三角同盟で、北方軍閥政府（呉佩孚・曹錕の直隸派）を打倒しようと北伐の軍を興し、

韶関から一挙に北京を目指そうとするが思うにまかせずにいるところ、一〇月二四日、突如、吳佩孚の腹心馮玉祥の寝返りによって曹錕・吳佩孚が追われ、北京政変が成った。孫文はこれを絶好の機会とみた。孫文は一〇月二七日馮玉祥にあてて、国家「建設の大計を速やかに決定せんと欲す、我即日北上して諸兄と晤商せん」<sup>(16)</sup>と打電し、一〇月三〇日はじめて広州に戻り、南方政府首脳に北上を確認させてしまったのである。

ところが、ブリュッヘルはまったく逆の結論を出した。いわく、「過去の経験は後方「広東」が完全に統一され、隣接する諸省の状況が好転すれば、北伐は成功するであろうことを示している。ところが現在そういった条件は一つも存在しない。故に北伐問題は国民党が広東を完全に支配し、陳炯明が粉碎されるまで日程に上らせてはならない」と。つまりまず陳炯明平定（ブリュッヘルはその時期を一九二五年一月の後半と予定した）、ついで北伐であり、「もし博士が北伐に戻ろうとするなら、それをあきらめさせることが必要である」。意見の対立は明らかである。ブリュッヘルは広東という革命の根拠地の確立ついで中央へといういわば地方革命論、それに対し孫文は以下に見るように、革命の成功は「中外古今、中央から革命をおこす方が容易」とみる中央革命論に立つ。勿論、孫文のいう北上とブリュッヘルのいう北伐は全く異質のものである。よって、まず、何故孫文が北上を強調するのか、そのロジックを辿ってみよう。その解答は孫文の二つの演説<sup>(17)</sup>一九二四年一月三日黃埔軍校での演説と十一月一日廣州での飲送会での演説とによって明らかとなる。

一月三日孫文が黃埔軍校で行なった演説は学生への最後の、それ故に永遠の訣別の演説ともなるもので、黃埔軍校の歴史にとっては記念すべき演説である。孫文はこの演説を「諸君、私が今日黃埔に来て話をするのは、しばらく、黃埔の学生に別れをつけるためです。別れの理由は私が北京に行かねばならないからです」という言葉ではじめてい

る。孫文はこのとき既に肝臓ガンが進行していて、「しばらく」は「永遠」に、「北京」は「天国」にとって代られるであろう。孫文はこれからほぼ四ヶ月のち、一九二五年三月一二日には五八歳の波乱に満ちた生涯を北京で終えることになっているのである。とまれこの黃埔での演説は要するに北上を要約して次のように説いた。この度の北京政変〔北方政府の支配者が曹・吳から張作霖・馮玉祥に代った〕は革命ではないが、将来中央革命を起しうる可能性のあることを示している。私の北上はその首都革命を準備するものであると説明した。しかし孫文はそれから八日後の一月一日「北上の意義と希望」と題する演説ではブリュッヘルの戦略をとり入れつつ大略次のように述べた。この度の曹・吳の打倒は革命の成功ではないが、北京なる同志との約束（北京に事変がおきたら北上するとの約束）を守るべく私は北上しなければならない。私の見るところ、すくなくとも二年ぐらいで北京に革命をおこさせ、政權を掌握することができよう。革命勢力はこれまで黄河を渡ることがなかったが、今や北方にのび北京に及んだ。かくて蒙古、青海に至るのに二年ほどはかかる。他方、南方に残った人々は広東の基礎を固め、革命の策動地とせよ。南方の勢力・力量を連絡団結して北伐し、武漢に至るべきである。北方と呼応して行えば、革命は完全に成功しよう。かくて三民主義、五権憲法が実行され、人々は革命の幸福を享け得ようと述べた。つまり地方革命論と首都革命論の二面作戦である。黃埔での演説からたった八日間ほどの間にブリュッヘルの提案を容れつつ自分の構想を貫ぬく折中案をとるに至ったのである。

孫文の二面作戦の一つ、地方革命論はしながら根拠地の確立よりもむしろ北伐に重点が置かれていた。一月四日（黃埔軍校での惜別の翌日である）には次のような指令を発して北伐の継続をはかろうとしていた。「本大元帥は統一と建設との要請で北上する。大本営総参議胡漢民を広州に留めて大元帥の職權を代行させる。大本営の北伐に

関わる全ての事柄は建國軍北伐總司令譚延闓が全權もて行ない、北伐各軍の全指揮をとる」と。譚の湖南軍を中心とする北伐軍は、韶関から新城、青龍を抜き、一月九日には江西省南部を陥し、吉安に進攻する勢であった。たしかに北伐の継続は客軍の離粵を意味し、広州市民への苛税を軽減させようが、ブリュッヘルの洞察した如く、多くはない南方政府の軍事力の分散をも意味し、それ故、広東における革命の根拠地としての南方政府そのものを危機におとし入れるであろう。孫文の戦略は軍事的に見れば明白な誤りであり、このことはやがて広州市の危機をもたらし、とて現実となる。

ところで孫文の北上は、初め（一九二四年）一月六日と定められたが一日にのび、結局は一月一三日に決行される。一二日から広州の各機関は孫文北上の歡送会を催し、提灯行列に二万人が参加した。一日、すべての機関は公務を休み、軍樂隊の演奏で孫文を見送った。午前一時二〇分、永豐艦（のちの中山艦）は広州の天字馬頭を離れた。随員は夫人のほか汪兆銘、政治部代理主任の邵元沖（政治部主任の戴伝賢は上海に在りそこから孫文一行に加わる）ら二〇余名であった。

この日の午後三時、永豐艦は黄埔に達したが干潮のため珠江を下れず、黄埔島に寄港した。これが軍校生みの親孫文の最後の訪問となる。このとき一期生は一月八日から二日までの卒業実演試験の真最中で、孫文は校長介石と共に軍校を一巡視察し、更に魚珠島砲台一帯で行なわれていた実演も参観し終って孫文は介石にいった。「余はこの度北京に赴くが非常に危険で無事帰って来られるかどうかからぬ。しかし余の北上は革命の爲であり、救国救民の爲に闘っているものだ。危険などとは言っておれぬ。いわんや私はもう五九歳だ。死んだとしても心は安らかだ」。介石はこの孫文の言葉に驚き、「先生、突然何を言われるのですか」と聞きかえした。「いや余はいささか感ずると

ころがあつてそうだったのだ。余の提唱した主義を出来るだけ早く実現してほしいが、今、黄埔の学生たちがよく勞苦に耐え、努力奮闘しているのを見ると、必ずや余の革命事業と余の生命とをひきつぎ、余の主義を実現してくれよう。およそ人は全て死ぬものだが、死に場所を見つけないければならぬ。二、三年前であつたら、余は死んでも死にきれなかつたろうが、今や黄埔の学生諸君が吾が未完の志を完成してくれよう。安心して死ぬるというものだ（今有黄埔学生諸君、可完成吾未竟之志、則可以死矣）」と言ひ終つて「慟惻にたえず」と年譜は述べている。孫文の姿にその場に居合わせた人々は限らない寂寥感を感じとつたのである。五時五〇分、孫文は再び永豐艦上の人となり、六時、艦は静かに軍校正門前の波止場を離れていく。全学生・全教職員は整列して見送る。ヴァラーフスキー号もホンコンまで護衛していく。林一広の伝える以上のエピソードは孫文の黄埔への期待をよく表わしているが、その孫文は一方ではなお湖南軍に北伐を命じ、他方ではソ連顧問たちに広東の統一もたくしているのである。これは孫文の性急さというより、プチブル・ラディカル・デモクラットとしての孫文の無原則性をも示しているものと思われる。

ところで孫文の随員として黄埔軍校政治部代理主任の邵元沖が広州を去つた。そのあとを襲つて代理主任となつたのが周恩来である（主任は名目上戴伝賢である）。周は恐らく一九二四年七月下旬パリを去り、モスコイ經由で九月上旬には広州に戻り、当時広東区委にしかなかつた軍事部の部長となり、戴・邵不在のあと十一月一日以後、黄埔の政治部代理主任を兼務したと思われる（以後周は一九三五年一月毛沢東に代るまで中国共産党の軍権を完全に掌握していたのは、この黄埔・広東の遺産による）。周はここで政治部の活性化と組織がえを考え、校長介石の伝統中国の兵学を核にして近代西欧兵学（日本を介して学んだ）を折中する方法を否定して、ソ連赤軍流の兵学を導入しようとした。また黄埔軍校を中心に中国革命を構想する黄埔中心主義なる考えを実行しようとするのである。



南方からの北伐という途をたくされた南方政府そしてソ連軍事顧問は陳炯明撃破と広東統一——これはやがて爆発的な農民運動を背景に瞬時に南中国を平定するであろう——を目指して秘策をねる。その武力闘争の中心はやはり黄埔軍校をおいてない。カルトゥノヴァが指摘するように「ブリュッヘルが重要視したのは黄埔軍官学校における将校の政治教育と、この学校で教育を受けた者が国民革命の部隊内で行なう政治工作であった。彼はたびたび全広東省内の政治情勢における学校の役割を強調した」。ブリュッヘルは一九二五年七月、病を得て帰国の途次、張家口で書いた報告書の中で、次のように黄埔軍校について回想していた。「学校の政治的影響はすでに一九二四年一〇月までに島〔黄埔島のこと〕の境界を越え、広東におけるすべての政治的發展の主要々因の一つとなった。…一步一步軍校はその政治的活動力を拡大し、軍校内で活動している共産主義者を介して労働者の組織と結合しつつ、広東の社会・政治運動のトップリーダーになりつつある」。黄埔学校が革命の根拠地広東でかく重要な地位を占めるに至ったのは、パヴロフが力説した、ソ連赤軍にならったコミッサール制の導入にこそあった。

## 第四章 赤軍の経験

### (一) コミッサール制と連坐法

「第一次フランス革命の当時、軍規を軍隊にもたらしたものは誰であったか」、エンゲルスはマルクスに一八五一年九月こう書き送った。過去の傭兵の時代における兵士の絶え間ない逃亡、軍規を維持するための「鞭の力」と報賞としての略奪の認可、そういったものに代って、フランス革命以後の所謂近代的戦争における軍規の形成こそ「市民

的強力」・社会的強制力換言すれば国家的統一と民族的独立をめざす農民・市民の、意識・戦意の高さ、「精神力」にあったとエンゲルスは見た。<sup>(19)</sup> ナポレオンは「世界には二つの力しかない。すなわち剣と精神である。精神とは市民的宗教的諸制度の謂いである。ついには剣は常に精神によって打ち破られる」と語っている。戦争において勝利をもたらすもの、それは市民の意識の高さ、市民としての覚醒にはかならずというのである。

しかし、市民意識・国家意識形成の相対的に遅れた後発国ロシアにおける軍規の形成は、むしろ前衛政党による「外からの」強制的な主義・思想のインドクトリネーションとして現われてくるのではあるまいか。事実、トロツキーの、そして中国におけるパヴロフの、すでに見たコミッサール制度の導入の仕方はそれを端的に示していた（その精神は新生ソ連の危機の真只中で構想されたトロツキーの場合に最も明瞭に現われ、コミッサール制と党規違反者への血の威嚇とがワンセットになっていたことはすでに述べた）。

党代表制の以上のような真の狙いを黄埔軍校の初代政治部主任の戴伝賢はよく洞察していて次のようにその事情を述べていた。

ロシアがはじめこの制度「コミッサール制を国共合作期は党代表制と訳した」を導入したのは、そもそもロシアの軍隊の八、九割がツァー時代（ツァー）の軍隊であり、将校もまたツァー時代の遺産で、多くの者が革命思想を持ち革命に賛成していたとはいえ、彼らのボリシェヴィキの主義・政策への理解、同意は不十分であったからである。労働革命政府が軍事権を統一し、軍隊の組織と運用を統一するには先ず各軍の意思を統一しなければならなかった。そのためにこの党代表制が導入された。この制度が導入されてはじめて、ボリシェヴィキ政府は少数の武力で多数の軍隊を統一し、それを革命政府の忠実な部隊に変えることができた。

この党代表制はすでに述べたように黄埔軍校の創立とともに導入されていた。一九二四年五月九日の開校とともに廖仲愷が黄埔軍校の党代表となり、校長蔣介石の上に置かれた（党を以て軍を統べる思想で、党代表は校長より上位と考えられる）。しかしその後、パウロフによつてその任務の規定がなされたにもかかわらず、パウロフ急死と蔣介石の反対があつたためそれは実行に移されなかった。ブリュッヘル到着後、教導団成立の直前、一九二四年一月一八日に王登雲を教導第一団党代表に任命したのが正式な党代表の第二号であつたと思われる（教導第一団は一月二〇日、第二団は二月二日に完成した）。孫文が離粵北上するのが一月一三日のことであるから、孫文離粵の直後、はじめて孫文は黄埔第一期生が少尉中尉として教導団の連長・排長・党代表などに配属されて兵を率いる真正の軍、信頼できる軍隊（これを校軍と称した）を持つことになった。両団合わせてその兵力は約千八百、これが中国国民党・共産党合作による国民革命を担う最初の軍勢力であつた。そしてこの校軍に一九二四年一月三〇日全面的にソ連赤軍の党代表制が導入されるのである。しかも重要なことは、一方ではコミッサール制を導入しつつ、他方では死の威嚇（革命連坐法の制定―後述）をもつて臨む市民意識未成熟型、トロツキーの赤軍型のそれであつたことである。つまり（後に詳述しようが）軍校当局は一方では政治部に政治訓練班を設置して党代表の訓練を行ない、校長の訓詞を与え、他方では中国の伝統的兵学の色彩の濃い「革命連坐法」を制定して死の威嚇を行なうのである。以下ではなおしばらくコミッサール制についての考察を行ない、ついで「革命連坐法」に言及することにしよう。

国共合作期におけるコミッサール制・党代表制<sup>(20)</sup>について、広東に駐在武官としてあつた佐々木到一陸軍少佐が言及している。同時代の日本軍人がコミッサール制をどうみていたか興味あるものである。佐々木はいう。「革命戦の成功は武力の優越が必須条件」であり、「この武力的優越には、武力が革命政府に絶対的服従の実」をあげなければな

らぬ」、「民国以後における過去の革命運動が常に戦争を請負事業と心得ておる雲助軍隊の力を恃みとした為に」、「武力の完全なる利用」に於て欠ける所があり、之が失敗の重なる原因」をなしていた。「廣東革命政府は此の根本主義を解決する為に如何なる手段を持ったか。それはコミッサルを以て組織する一種の細胞組織網を以てする武力統制法を案出した―実は模倣した―一点に存するのである」。「党代表と称するコミッサルは、上は総司令部、軍、師等より下は連、排、班（中隊、小隊、分隊）に至るまで配置せられ」、「彼等の任務は便宜上之を消極と積極に分つことができる。消極的任務は軍隊を監視し、その離反を防ぐもので」、「積極的任務としては軍隊と行動を共にし（軍律の適用を受ける）、鞭撻し、激励するの効用がある」。「換言すれば軍隊をして均しく革命目標に向つて邁進せしむる為め、その完全なる統一指揮を実現することを以て理想としている」。

佐々木少佐は党代表の任務権限を消極と積極に分け一般的に述べていたが、果してその任務権限の内容はどのようなものであったのか。現在我々が見ることのできるものは

① 一九二四年七月一六日パヴロフの提案になる二条（註（7）参照）。

② 劉文島「一個政工人員之回憶」（『國軍政工史稿』、『革命文獻』第十輯に引かれている八ヶ条）

③ 「国民革命軍党代表条例」二六条（『黄埔軍校史料』、『革命文獻』第十二輯所収）

の三史料であるが②は③より以前で、①のあとに制定され、③は一九二五年八月一六日の国民革命軍成立以後のものである。黄埔軍校当局は、パヴロフの二条が出された一九二四年七月から「国民革命軍党代表条例」が出される二五年八月までのほぼ一年間、党代表の権限任務に関する具体的な規定を制定しなかった。劉文島の伝える八ヶ条は、当時の慣例であったようだ。たとえば、教導団が成立した直後、一九二四年二月一日に政治訓練班が置かれ、二月

一日第一期卒業生の見習士官、見習党代表の訓練が開始され、翌一二日に校長蔣介石の党代表への短い訓詞がなされた。その訓詞で介石は党代表の職務に言及している。党代表制施行直後のものとして注目に値しよう。いまその全文を訳出する。

今日諸君に話したいことがいくつかある。我々は党代表を派遣したが、これまでにほとんど効果が上っていない。つまり党代表の責任を果していないのだ。敬礼にしても兵士の手本となるどころか、上官に合ってもいいかげんな、いささか得意驕慢といった有様である。よってまず第一に「驕」（おごる）の字を去らねばならない。驕り高ぶる人が他人に親愛の情を持つはずもなく、他人からも親愛の情を持たれる筈もない。党代表の責任は他人を感化させること、要するに言葉、行動、態度において黙々とみずから留意点検し、人々に親愛され尊敬されるようになることである。

『国軍政工史稿』は「党代表の職務と地位は極めて高い。しかし党代表の責任、任務に明確な規定がなかったために弊害が生じ、少数の党代表はその職権を利用して、学校とか部隊の行政に干与し、自己の責任と任務をつくさない者が出てきた」と述べた。佐々木到一もコミッサール制の長所を認めつつも、コミッサールと軍隊との関係は、「前者に隠密的監視の意味」があり、「一面に於て軍を統一する要件となっているが、他面に於ては両者軋轢の因を成し」、「現に軍隊有力者間には若いコミッサールの生意気に対し憤慨する者」があったと指摘している。蔣介石の話は続く。

第二に、党代表が置かれなかった時、各連・營長は自から全責任を負った。党代表が設けられてから、全ての命令、報告に党代表が副署してともに責任を負うことになり、党代表は以後命令報告に慎重ならざるを得なくなつた。現在、多くの病兵、逃亡兵、遅刻がある。党代表は連に何人病人がいるか、何人逃亡したか、毎日の点呼の

時にはっきりと把握しておけ。これは連よりも營の方が、營より団の方がより複雑であろう。連長は營長に対して連の全般的責任を負い、党代表は党内のことにつき全般的責任を負う。兵士の月給、食事、衣服など党代表は常に検査し、すくなくとも我が軍隊にいまの西南各軍〔同盟軍の雲南・広西軍のこと〕の如き欠陥をあらしめないうようにせよ。

教導団の兵卒たちはやがて国民革命軍の構成員となる。ところで我々の国民革命のイメージは、革命精神にもえ祖国防衛のためにみずから進んで従軍する一人の兵士というものであろう。<sup>(2)</sup>陳独秀の「造国論」のめざす所もプロレタリアート、ブルジョワ兩階級のナショナルな意識に支えられた「国民革命軍」の創出を説いていた。教導団に集まった兵士たちもそのような愛国心のはとばしりを共有するものと見たが、やや観念的にすぎたようだ。現実的にここ黄埔で兵士の逃亡が頻出していたことをこの蔣介石の訓話は発露している。もちろん兵士を教導する第一期の学生たちは幹部候補生であって兵士ではない。両者の間には大きな身分上の差別が厳存し、兵士は人間ではなく消耗品とみなされていた。また兵士の方もただ食のためにのみ軍隊に加わり、主義思想を理解する者はごくまれであったとみられる。党代表はこのような兵士を指導し、略奪にあけくれる同盟客軍（雲南・広西軍）の如き欠陥をなくすべきであるというのである。

党代表は兵士が君達党代表の教育と我が国民党の主義とを受け入れて効果をあらわすようにさせなければならぬ。そのためには先ず兵士に標準語を理解させ、言葉の意味を教えてのち初めて教育をほどこすことになる。更に重要なことは、党代表は兵士の中に入っていき彼らの言葉を学びとることだ。こうして初めて兵士は感化され、主義を理解できるようになる。もし君達党代表が尊大にかまへ兵士との間に壁を作ってしまうと、兵士は君

達を上官とみなし、敢て近づこうとせず、話かけようとせず、かくて下情が上達しなくなってしまうだろう。君達が兵士は兵士と見れば両者に感情の交流なく、兵士が君達の話の聞いてもなじみのないお上の言葉と受けとり、教練も主義も受け入れられず党代表の責任も果せない。いま病気の兵士は二、三割いる。党代表は常に彼らを見舞って慰めてやるべきである。兵士たちは故郷を離れて知る人としてなく、孤独に苦しんでいる。そういう兵士を憐れんでやれ。君達が彼らの病いを治してやることこそ、親愛団結の任務の手始めだ。連長の責任は教練と指揮にある。党代表の責任は兵士の経済状況、生活状況、政治訓練を監督するためにある。これは最も重要な任務だ。「教・養」の二字は党代表が党から依託された大責任である。「日報表」を作り毎日報告すること、その点によく留意せよ。党代表が全連の兵士に主義を理解させたなら、たとえ給与が遅配されても不測の事態は発生することなく、ひき続き政治工作を行なっていけよう。それでこそ党代表が万能で、我々が党代表を部隊に派遣するその期待にそむかぬものであらう。要するに党代表の意見に全連の兵士将校がいささかの異議もなく心から服従して、初めて党代表の効果があらう。

以上で二月一二日の校長の党代表への訓詞は終っている。校長介石がはじめて党代表制に言及するのは実はこの訓詞の四日前、二月八日、軍隊で重要なのは精神だと述べる文脈中で次のように短く党代表制に言及した。「革命軍精神の凝集力は各連の党代表にある。党代表は兵士の生活、衛生などすべて処理しなければならない。病気はないか、生活は適当か、これらは完全に党代表の責任である。また戦場においても党代表がおかれることで戦闘能力が高められうる。もしこの制度が真に実行できたら我々革命軍は必ずや成功するであらう」と。さらに校長介石が三度党代表制に言及したのは二月一六日のこと、第一期の学生に向って、「連・營・団の党代表の権限はもうきまっ

いるから私が話をする必要もないだろう。しかし党代表が連・營・団に配属されたからには、各連・營・団の長官は干渉主義をとらず監督の態度をとるべきであろう。經理衛生については党代表が各連・營・団の長の及ばない所を補助せよ。党代表制がうまくいけば軍隊は良くなる。兵士の生活、軍紀、風紀について指揮官の至らない所あらば党代表がそれを改めるべきであろう。中国の軍隊が党代表制を施行するのは初めてのこと、本校長としてはこの制度を必ず実行したい。軍隊がなくとも党代表制だけはなくてはならぬと思っている。君達党代表は自重自愛せよ。職権を乱用して今日の中国軍を救済しうる唯一のこの制度を破壊してはならない」と述べた。

校長介石の党代表制に関する以上三つの訓詞<sup>(22)</sup>を見ると、營・連レベルの党代表の具体的任務の内容規定に費やされているのがわかる。党代表の権限はもう定められているから、具体的任務について述べるというのだ。それは要するに、党代表が兵士の經濟、生活、政治訓練、衛生などすべての面にわたって指導、教育、教化の役割任務を持つことである。しからば最初期の党代表の権限は何か。一九二四年七月バヴロフの定めた二ヶ条は軍隊内の命令への党代表の副署と軍隊内の法令への党代表の副署の必要性を説くものであった。劉文島の回想による党代表の八ヶ条にわたる権限はこの二ヶ条を更に詳細に規定したものである。そしてこの八ヶ条は一九二五年八月の「国民革命軍党代表条例」の制定以前のものであろうが、一体いつ制定されたものであろうか。『国軍政工史稿』はこの八ヶ条は当時の慣例であったと述べているが、ともあれその八ヶ条とは次のようである。

- ①党代表は部隊内の行政に対して隨時監察の権をもつ。
- ②党代表は工作遂行の補助の便宜を図るべく特別な委員会を組織しその成員を選ぶ権限を持つ。
- ③党代表は所屬党部の執行委員会に入りその委員となる權利をもつ。



④ 党代表は党務及び政治工作の処置につき、単独で命令を発する権限をもつ。但し、その部隊の同級の指揮官に通知し、軍事行動を防げてはならぬ。

⑤ 党代表は部隊の同級の指揮官の発する命令が明白な誤まり、大きな間違いと判断したとき、サインを拒否する権限がある。但しその場合直ちに上級機関に自己の見解を申しのべよ。

⑥ 党代表はその部隊の同級の指揮官の発する命令が、国民革命の遂行に危害ありと判断したとき、その命令が伝達されないよう努力せよ。もしすでに発せられたならば、党代表は即時単独で命令を発し、部下に実行を許さぬようにさせる権限をもつ。但し、他方速やかに相当の機関にそれを報告せよ。

⑦ 党代表は次の二項の場合、即時これを弾圧し、犯罪者を逮捕して法廷に送る権限をもつ。

① 指揮官が明白に反乱の意志を示したとき。

② 軍隊内に謀反掠奪の暴動ありしとき。

⑧ 激戦時、その部隊の同級の指揮官が戦闘力を失うかあるいは戦死し、しかも新任の指揮官が未到着のとき、党代表は自らその部隊の戦闘を指揮するか、あるいはその部隊内での優れた士官に暫時戦闘の指揮をまかせうる権限をもつ。但しそれは即時上級機関に報告すべし。

一読して明らかのように、ここでは党代表に巨大な権限が与えられ、かつ、軍事指揮官への不信の念が横溢している。つまりこの八ヶ条は旧ツァー将校を軍事指揮官とし、ヴォルシエヴィズムの精神に満ちた党代表がそれをチェックするトロツキー型赤軍の経験の反映であると思われる。してみればこの八ヶ条はパヴロフの規定した二ヶ条のより詳細な規定として、二ヶ条と同時に制定された可能性が強いとみるべきであらう。のち一九二五年八月に至って「国

民革命軍党代表条例」二六条が制定され、党代表の権限が縮小されるのは、ソ連赤軍と国民革命軍の成立の違いが理解されるに至ったからであろう。その意味で、三度にわたる党代表制への言及において、蒋介石の関心が専ら党代表の兵士への paternalistic な配慮と志気の高揚にあったのは、むしろ正しい直感であったと思われる。校長介石が党代表の権限の大きさにつき述べて、むしろその感化力たる任務に話の力点を置いたのは、中国軍と中国革命の実情からするソ連式コミッサール制への現実的直しとも見られ得よう。兵士の市民意識の欠如を前提として、さらにそこに介石の中国の伝統的兵士観（『論語』子路「以不教民戰、是謂棄之」）と兵士を「教育」（教え養なう）する将校エリート論との結合である。

## （二）連坐法

さて次には党代表制とワンセットになっている「連坐法」にふれよう。「連坐法」は正しくは「革命軍連坐法」と呼び一九二五年一月六日に制定された。ところで、制定に先立って蒋介石は第一期生への訓詞の中で、三度これに言及している。<sup>(23)</sup> いずれも「連坐法」制定以前のものとして、その成立の経緯を知ることができるが、がかりである。つまり、

- ①黄埔第一期生への第二七次訓詞（一九二四年一月二十九日）
  - ②教導団士兵への第三次訓話（一九二四年二月二十五日）
  - ③黄埔第一期生への第三〇次訓詞（一九二四年二月二十八日）
- の三回であり、そのうちに
- ④革命軍連坐法（一九二五年一月六日）

の制定・公布を見た。

蒋介石の第二七次訓詞の中での連坐法に関する部分は凡そ次のようである。戦闘の秘訣は「我れが敵を恐れなければ敵は必ず我れを怕れる」にある。我々は主義のため正義のため人類のために死んだとするなら、それは死に場所を得たということだ。人は百歳まで生きたとしてもやがては死ぬものだ。我々はまた何で死を恐れよう。戦場での最大の欠点は退縮（恐れ逃げること）である。真の軍人はたとえ弾丸がなくなっても銃剣をつけて前進し、上官の命令がなくなると死ぬまで退却しないものである。これから君達は兵士を統率することになるが（この一期生は卒業直前である）、戦いに臨んで退縮する者は銃殺に値いし、命令があるまで決して退却してはならぬということを銘記せよ。ロシアの革命軍には一連が退却したら連長と党代表が銃殺され、一営一団が退却すれば同じように処罰された。かくて軍隊は戦いに臨んで退縮せず、革命は成功を収めた。むかし我國の軍人岳飛や戚繼光の軍の統率は非常に厳格であった。たとえば一排の人が退却すればその排の長が処刑され、一連が退却すればその連の長が処刑されたと。

校長介石はここで司馬遷の死の定義（のちに毛沢東もひくことになる）をふまえつつ敵を恐れぬ精神を強調し、ついでロシアの革命の成功の鍵は一営が退却すればその営長が銃殺されるという恐るべき「連坐」法にあったこと、さらにこの法は中国の伝統的兵法にも見られたと指摘した。ただし「連坐法」という言葉は用いられていず、死も恐れぬ精神を持つという文脈の中でこの法に言及されているにすぎない。それからほぼ一ヶ月後、蒋介石は教導団士兵への第三回の訓詞の中で、「戦闘の時上官の命令がないのに一班の兵士が退却したら、班長を銃殺にする、一排の兵士が退却したら排長を銃殺にする、一営一団も同じ」と述べ、「上官は本来君達の父兄と同じであり、上官が戦死したのに自分達が逃げかえってくる、それで果して『人の心』があるといえるか」、そもそも「官長は学問がある者だ、

皆はその官長に従って戦えば必ず勝つ」、この「連坐の軍法」によって団長・營長がふみ止まって戦えば、兵士も皆死ぬまで戦うであろう。もし君達が戦死したとしても、上官は君達の軍功を記念し烈士として「石碑を立てて祭祀し」、残された「君達の家族を安撫する」であろう。かくてこの「連坐の軍法」によって「万衆一心」「万人一力」となる話を結んだ。この訓詞の中で介石は連坐法のことを「連坐的軍法」とか「連坐的紀律」と呼んでいた。

この訓詞から三日後、三度介石は連坐法に言及した。しかも特に留意すべきは、戚繼光の『練兵実紀』に沿いつつ連坐法を説明していること、その説明が三日前の教導団への訓詞とほぼ同じ文章であることである。ソ連赤軍の例をヒントにしながら、介石はその類似物を中国の伝統的兵学・戚繼光に求めたのである。いまその訓詞の連坐法にかかわる節を訳出しておこう。曰く、

昔中国の兵法家・明の戚繼光は二〇項目にわたって勇強な軍隊の諸要素を分析した。その第一は編成である。これは軍隊を節制ある軍隊にするものでこれは全体の二〇分の二を占める。連坐も同じく二〇分の二を占める。

とあって、以下革命軍連坐法の前文のほとんどを構成する連坐の説明の部分があり(後述)、さらに、信賞必罰も二〇分の二、号令の厳明が二〇分の二、兵器精良が二〇分の二、戦術の精詳も二〇分の二、勇将精兵は二〇分の一、團結精神は二〇分の五(以上全部合わせて二〇分の一八、介石は一項目とばしてしまったようだ)を占めると。つまり連坐法は『練兵実紀』の叙述の一要素を占めるにすぎなかったが、これを党代表制と組み合わせ、大きくとりあげたのはソ連の赤軍にならった為に生じた現象である。

さてしからば、次に一九二五年一月六日黃埔当局の制定した「革命軍連坐法」の全文を見よう。それは以下の前文と五ヶ条の条文よりなるものである。

これまでの軍隊は指揮統率〔節制〕なるものを知らず、上下互に連繋がないため、前進する者は徒死して賞なく、賞を与えようにも監査制度がなく、退却して生きのびても罰せられず、罰しようにも監察制度がなかった。よって今節制を以下の如く定める。

と述べ、以下校長介石の第三〇次訓詞と教導団士兵への第三次訓詞の中の連坐に関する部分（両部分はほとんど同じ文、違いは教導団の方が学歴の低い者が多い兵卒対象であることを考慮してか、すこし分り易い口語であること）を、文語文に直したものが続く。曰く、

一班〔二人〕が退却すれば班長のみ銃殺す、一排〔三十六人〕が退却すれば排長のみ銃殺す、一連が〔一〇八人〕が退却すれば連長のみ銃殺す、一営〔三二四人〕が退却すれば営長のみ銃殺す、一団〔九七二人〕が退却すれば団長のみ銃殺す、一師〔二九一九人〕が退却すれば師長のみ銃殺す。さすれば退却したときただ四、五人の長を銃殺するだけで兵士には及ばず、従って兵士は勝手に退却してもよいように思えよう。しかし仔細に考えてみると、この法が一度実施されると百万の兵士の前進後退はすべて監査され、数人が銃殺されるだけであるが、百万の兵士も皆退却を恐れることになる。それはなぜか。たとえば一団の兵士がすべて退却したなら必ず団長が銃殺される。団長は自分の部下の団の兵士が退却をはじめても、自分は断乎退却しないとす。団長一人が退却せず敵の攻撃を受けて戦死したとしよう。我々は彼の部下である三人の営長を銃殺して団長の命をつぐなわせるであらう。営長にしてみれば団長が退却せずに戦死したら自分が銃殺されることになるから、退却しえないであらう。営長の部下の連長も、営長が退却せずに戦死したら自分が銃殺されるので、退却しえない。連長が退却せずに戦死したら、その部下の排長は銃殺される。排長は銃殺を恐れて退却しえない。その部下の班長は排長を戦死

させて、自分が司令官に罪を問われて銃殺されるのを恐れて、班長も排長を護り、退却しない。一班の士兵たちは、班長を戦死させ一班の者が全て銃殺されるのを恐れて、ひたすら班長を護りふみとどまって戦い退却しない。かくて死者は戦死せる部下数人に止まり、百万人が同じ心になる。一体誰が敢て軽々しく退却しよう。

以上は介石の訓詞の中から連坐法について説明した部分であり、革命軍連坐法の前文の主要部分をなしている。前文は最後の段落に続いていく。

この連坐法が施行されれば、全軍は「刀を頭上にかざされるが如く、縄もて足を縛らるるが如く、節目ごとに相互に助け合う連坐の網の目から誰も逃れることはできない。兵法に「強者も単独で前進できぬ、弱者も単独で退却できぬ」という。また「万人一心」「万人斉力」ともいう」。真に成功を収めようとするなら、この連坐法を実行しなければならない。今より以後、革命軍はこの連坐法を実行する。各将兵は順守して違反するなかれ。この条例を空文とみなしてはならぬ。

この連坐法は既に述べたように威継光の『練兵実紀』によっている。前文の最後の段落中のカギカッコの部分は事実『練兵実紀雑集』巻四からの引用である。そのほか『練兵実紀』巻二、練胆気の条に、平時戦時にかかわらず、号令への違反や退縮に対して、五名以上を指揮統率する者はその中の一名が違反すれば必ずこれに連坐す〔管五名以上者、一名有犯必連坐之〕、さらに二〇名以上の部下のうち二名が違反すれば、その指揮官が連坐させられる、以下百名以上は十名、三百名以上は二〇名、一万名は五百人などであり、『練兵実紀雑集』巻四、にも「一營が退却したらその營の主将を殺せ〔斬首して衆に示せ〕、主将が退却せずそのために戦死したなら千総をすべて殺せ」などとある。威継光は中国伝統兵学の完成者として著名であり、太平天国鎮圧の曾国藩が威継光に傾倒していたことは良く知られ

ている。そして蔣介石は武將としての曾国藩、胡林翼を敬慕してやまず、『曾胡治兵語録』（一九二四年一〇月）なる書物を編纂し学生の必読文献としている。また連坐法は袁世凱の新建陸軍の軍律の第八条にとり入れられていることもよく知られた事実であった。

さて以上で革命軍連坐法の前文の紹介検討を終え、次に五ヶ条にわたるその全条文の訳を次に示しておこう。

第一条 本党は国民革命を完成し、三民主義を実行するを目的とす。各官兵は犠牲的精神を發揮し、敵と戦うとき、いかなる危険であろうと戦いに臨んで退却してはならぬ。

第二条 本連坐法は戦時戦いに臨んで退却する各官兵に適用する。

第三条 連坐法の規定は次の通りである。

- 一 班長が全班と共に退けば班長を殺す。
- 二 排長が全排と共に退けば排長を殺す。
- 三 連長が全連と共に退けば連長を殺す。
- 四 營長が全營と共に退けば營長を殺す。
- 五 團長が全團と共に退けば團長を殺す。
- 六 師長が全師と共に退けば師長を殺す。
- 七 軍長もまた同じ。
- 八 軍長が退却せず全軍の官兵が皆退却して軍長を戦死させれば、その軍長所轄の師長を殺す。
- 九 師長が退却せず全師の官兵が皆退却して師長を戦死させれば、その師長所轄の團長を殺す。

十 団長が退却せず全団の官兵が皆退却して団長を戦死させれば、その団長所轄の營長を殺す。  
十一 營長が退却せず全營の官兵が皆退却して營長を戦死させれば、その營長所轄の連長を殺す。  
十二 連長が退却せず全連の官兵が皆退却して連長を戦死させれば、その連長所轄の排長を殺す。  
十三 排長が退却せず全排の官兵が皆退却して排長を戦死させれば、その排長所轄の班長を殺す。  
十四 班長が退却せず全班の官兵が皆退却して班長を戦死させれば、全班の兵士を殺す。

第四条 各級の党代表にも本連坐法を適用する。

第五条 本連坐法は公布の日から施行する。

この連坐法も含めてソ連赤軍の影響がどのようにあらわれたか更に具体的に考察しよう。第一次東征と呼ばれる対陳炯明戦（広東省の南方政府による統一の第一歩）の場合である。

## 第五章 ブリュッヘルヘルの戦略

### (一) 第一次東征<sup>(24)</sup>

孫文の北上後、一九二四年十一月末頃から広東の政治軍事状況は次第に緊張を加え、一九二五年に入ると事態は急迫を告げはじめた。まず江西戦線では北伐中の湖南軍は江西省南部の処点を奪い返され、広東省境までずると後退を重ねた（一月四日）。ついで湖南戦線でも北伐の一支軍（程潜）は唐生智軍に拠点地・汝城（湖南最南部）を奪われた（一月一二日）。さらに広東省東部にある陳炯明は汕頭より広州に攻撃を加えようとしていた（一月七日）。広東省



西方では、広西省桂林から陳炯明と結ぶ沈鴻英軍が広州への攻撃を行わんとしていた。のみならずひざもと広州市の商人たち商団軍も再び陳軍と呼応して南方政府の内部から蜂起せんとしているとの情報も入った。果してこの四面重囲の敵の中でまずどの敵をたたくべきか。果して南方政府は生き残りうるのか。一九二五年一月一八日の第五回軍事委員会（主席は楊希閔）はそのような危機の中で開かれた。そのメンバーは廖仲愷、胡漢民、許崇智、蔣介石、楊希閔、劉震寰、孫科そしてブリュッヘルであった。この会議で劉震寰は北部戦線（広西）を重視した。楊希閔は北部と西部戦線を主戦場とし東部戦線（つまり陳軍との戦い）は防禦に限定させよと主張した。二大客軍の総司令はかく東部戦線を全く軽視していた。しかしブリュッヘルはまったく逆の結論を出した。つまり東部の陳軍からの危険を根絶することが主要問題である、省の北部西部に兵力を割くのは広州の喪失、我が軍の敗北を招くであろうと力説し、かつ陳軍への攻撃を二月一日に開始することを要求した。会議は延々と続いたが、ついにブリュッヘルの提案は受け入れられた。この間の事情について当時ソ連の駐華武官であったA・ゲッセルは、一九二五年三月カラハンに宛てて次のように書いた。「わが軍事顧問ブリュッヘル同志が広州の将官団に一ヶ月半にわたって働きかけた結果、陳炯明軍に対して直ちに攻撃に移ることの必要性について最終意見をもたせることができた。一月末までに攻撃に関する決定が採択された」。

この会議のあと、一九二五年一月二一日、レーニン追悼の席でブリュッヘルは、チェレパノフのメモによれば、次のようなことを語った。「我々の強さはこの国における革命の強さと働らく人々の国民意識の高揚の中にある」。あるいはこうも語った。「レーニンは幸福を求める闘いに人々を導いた最初の人であった。彼によってロシアの国民は勝利を得た。中国人は帝国主義の圧迫に苦しんでいるが、レーニンの指令を実行することによってのみ解放されえよ」。

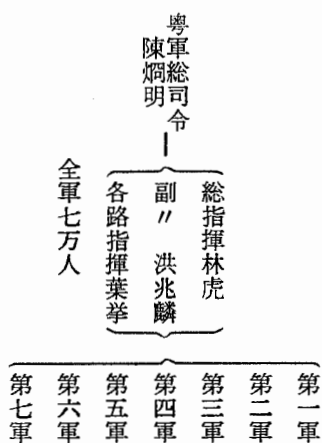
う」と。ここ中国におけるこの戦いはレーニンの遺意を継ぐ反帝国主義の戦いであるというのである。その第一歩こそ惠州汕頭を根拠地とする陳炯明軍の討伐であり、それは一九二五年二月一日と定められた。これに先立って一月二十九日軍校では早くも動員準備を開始した。いまこの第一次東征の詳細な戦闘過程を述べる必要はないであらう。ただその全体像を簡単に要約しつつ黄埔学生軍の活動の一端を明らかにし、ついでソ連軍事顧問団の役割活動に言及することにしよう。

# (1) 第一次東征作戦経過

(A) 時 一九二五年二月一日～三月二三日。

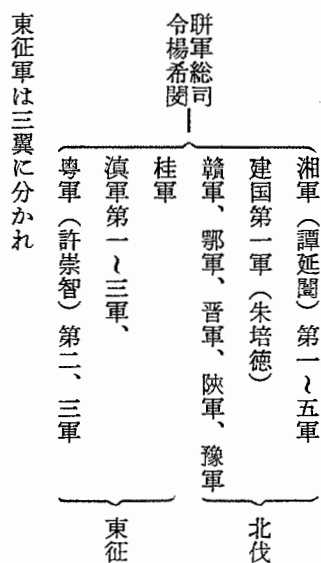
(B) 地域 広東省東江及び広九鉄道以東の全広東省。

## (C) 陳軍指揮系統



## (D) 政府軍指揮系統

ソ連軍事顧問団と黄埔軍校



左翼—滇軍  
中央—桂軍（惠州攻撃軍）  
右翼—粵軍と黃埔軍

つまり黃埔學生軍は右翼に加わった。ここには粵軍第一師（張明達が師長、下に三旅あり）と第二師、および第七旅（許濟）の第一四團（張我東）、そして黃埔軍、ここには教導第一團（何応欽）と同第二團（王柏齡）、第二期學生（歩兵、砲兵、工兵、輜重）、第三期入伍生第一營、鉄甲車隊が含まれた。右翼軍は全三万、黃埔學生隊は全軍二千人ほど。

(2) 第一次東征各個戦役略述

- (A) 平湖・広九路戦 一九二五年二月一日～一二日まで。広九鉄道の全沿線（深圳まで）の平定。右翼軍による。
- (B) 淡水戦 二月一三日～一七日。敗退した陳軍を追って淡水城に戦い、一五日にこれを陥す。右翼軍による。こ

のとき惠州攻撃の桂軍はまだ攻撃を開始せず、滇軍は増城、博羅の間に戦う。

(C) 平山・海陸豊戦 二月一九日～二八日。同じく右翼軍による。二七日に海陸豊を占領する。陳炯明の一族は三月三日ホンコンに逃がれる。

(D) 潮汕戦 三月一日～七日。陳軍は平山の敗戦で戦意を失ない、潰走しつつ潮州・汕頭地区に退却した。右翼軍これを追って潮州・揭陽・潮安を結ぶ線にまで深く侵入した。三月四日陳軍は汕頭より退却、三月七日陳炯明は海籌艦にてアモイに退く(ついで上海に赴く)。しかし残留せる陳軍は深く侵入してきた右翼軍の背後から起死回生の反撃を試みようとする。

(E) 棉湖戦 三月一〇日～一五日。右翼軍の一部全軍四千(右路第七旅二千五百、中路教導第一団、左路第二団)は陳軍第一軍第二軍の一部約三万と棉湖附近で遭遇した。戦闘は一三日一〇時から一九時まですぎまじい白兵戦となり、黄埔軍は二百余名が戦死した。この戦役はほぼ一〇倍の敵に苦戦のち勝利を収めたこと、孫文の死(三月一二日)と重なったことで黄埔生にとっては思いで深い戦いとなった。『棉湖戦役四十週年記念特刊』なる書物も編まれている。

(F) 五華・興寧戦 三月一五日～二三日。陳炯明はすでに逃亡しているが、五華・興寧は陳軍の根拠地で、これを一九日から二一日までの激しい戦いの末取り、林虎、洪兆麟の主力軍は江西・福建に逃げこんで第一次東征はここに終りをつけた。東征軍が孫文の死を告げられたのは三月二一日午後五時のことであった。翌二二日から二七日まで孫文の死を悼んで喪に服した。

さて以上の戦闘の経過でソ連の軍事顧問はいかなる役割を果たしたのか。それを教えてくれるのが右翼軍と共に戦闘

に加わったチェレバーノフの回想である。彼の回想は『第一次東征実紀』、『北伐戦史』、『北伐簡史』など蔣介石の軍事的能力を専揚する文献では見られないユニークな觀察を我々に与えてくれる。以下ではソ連軍事顧問団およびブリュッヘルと言動に焦点をあてつつ各個戦役をもう一度巡ってみよう。

北伐よりも広東の根拠地の確立を優先と考えるブリュッヘルにとって陳の反政府活動は渡りに舟であった。一九二五年一月、彼は軍事顧問団たちを前にしてこう語っていた。

奇妙なことだが陳炯明こそが即時東征決行を政府に主張する私を助けてくれたのだ。陳の一二月二五日の商団への密電―広州の解放を約束したが、政府に警告を与えた。しからば広州への脅威をいかにして防ぐか。私の解答はこうだ。陳の攻撃は我々の最良の軍の発動による我々自身の反攻によって阻止されなければならないということだ。

かくて一九二五年二月一日に出動した黃埔軍はまず広九鉄道ぞいの陳軍を降した。二月八日許崇智、ブリュッヘル、バラディーン、政府要人たちが会議をもった。そのあとブリュッヘルは顧問たちにこう語った。「私は黃埔軍校を基幹として編成された部隊に特に期待している。彼らは指導的な部隊になるであろう。その部隊に付く我々顧問の役割は特に重要である。君たちは持てる軍事的才幹と革命的情熱を示さなければならない。君たち顧問のアドヴァイスは適切に実行されなければならない」。ブリュッヘルはこの話を「淡水へ進攻せよ」なる言葉でしめくくった。ところでこの軍隊についてのチェレバーノフの描写は興味あるものである。まず教導第一第二団には一匹のポニーしかなく、それは何応欽の専用であった。連隊長や高級将校は駕籠 *palanquins* に乗った。ソ連軍事顧問たちは皆兵士と同じく徒歩で行進した。二月といっても広東は温暖で兵士は半ズボンにわらじばき、ゲートルをまき、防水の赤軍式帽

子あるいは麦わら帽子あるいはカサヤトレンチコートで行軍中のスコールをしのいだ。行軍は二、三時間に一五分から二〇分の休憩をとった（赤軍は五〇分の行軍に一〇分の休憩）。食事は一日に二度であった「広東の習慣」。チェレパーノフはまた張明達の軍が税を徴集するために「つまり略奪のことと思われる」、淡水城への一番のりをしたがっていたこと、これをやめさせようとする顧問の忠告を張明達らが少しもきき入れなかったことを述べていた。

ソ連軍事顧問は中国側の主要な將軍たちに配置された。後に詳しくのべようが、教導第一団の何応欽にはベシヤストノフ、ニクリン、チェレパーノフが、教導第二団の王柏齡にはドラトヴィンとパロが、蒋介石にはステパーノフ、粵軍第七旅にはワシリエフが、粵軍總司令許崇智にはブリュッヘル自身がついた。（この時点において最も信頼でき最も有力な將軍は粵軍總司令の許崇智であったこと、蒋介石は軍校の校長ではあるが実力は許より劣るものとみなされていたことを示そう）。

一九二五年二月一五日の淡水城攻撃では、ベシヤストノフの指導で日本の有坂砲を用い厚さ一メートル、高さ四メートルの城壁を撃破し、教導第一第二団が占領した。敵は七百人が千丁のライフル、六丁の機関銃で守備をかため、黃埔軍は一〇人が戦死し、四〇人が負傷した。この淡水戦についてチェレパーノフは次のように総括した。「この日（二月一五日）の戦いの結果を総括するなら次のようになる。教導第一第二団の兵士と黃埔一期卒業の將校の示した武勇は注目に価する。彼らは上級將校たちの如きベニツクに陥いらず、最も危機を迎えた時ですら彼らは正確に命令を実行した。我々は蒋介石と彼の幕僚、第二団の王柏齡らがベニツク・恐慌状態になったのを目撃した」。教導第二団（王柏齡）の第七連連長孫良はこの戦いで退却したとされて二月一七日連坐法に照して処刑された。しかしチェレパーノフによればベニツクになって逃げ出したのはむしろ蒋介石、王柏齡らであったという。もしそうなら孫

良は彼らの身代りに処刑されたことになる。ともあれ孫良が連坐法適用の第一号であった。チェレパノフはさらに「粵軍第二師の張明達將軍は決然とした精力に満ちた軍事リーダーたることを証明した。誰もがソ連顧問の勇敢さについて語った。私の見るところ、我々はまだ戦闘において中国人指揮官たちと良好な関係を持っていないこと、我々は戦闘における指揮権を完全に手中に収めていないことがはっきりした」と述べていた。

淡水戦のあと二月一八日ブリュッヘルはソ連顧問たちに語った。「雲南の唐繼堯は呉佩孚と結んで広西攻撃の同意に達した。唐は広西を取り更に広州を攻撃しようとしている」、「とはいえ今日広州への最大の脅威は西からではなく東からだ。広西の同盟軍は唐軍の前進を十分に止められうる」、「今広州政府の置かれている困難な状況は資金の欠亡だ。廖仲愷が広州の商人から借りようとしているが、それにはまず陳炯明に勝たねばならぬ。勝てば商人たちは資金を出そう」。更にブリュッヘルは語をついで「今度の戦いから得た経験では、すべての顧問とは言わぬが、軍の中で適切な地位を得ていない者があるということだ。次のことはよく憶えておくべきである。ある顧問の参加によって得た勝利はその顧問の手柄になることもあるしならぬこともある。しかし戦いに敗けたら、たとえ君達にいかなる誤まりがなくとも、敗戦の責任はすべて君達にあるということ。我々は常に全局面に気を配り、將軍たちに我々の忠告を受け入れられるよう断乎として主張せよ。但しそうかといって我々が代って指揮をとれというのではない。行軍中にも戦闘中にも彼らに教え彼らを生長させることそれが我々の任務なのだ」という。ブリュッヘルのこの顧問観はよくその本質をついているといえよう。

海陸豊の戦いは二月二一日から二七日まで続き、敵軍を撃破して終った。ブリュッヘルは息もつかせぬ迅速な攻撃で敵の主力部隊を殲滅しようとしていた。ブリュッヘルはいう。「更なる東方への前進が早急になされるべきであ

る。かくて遅くとも三月八日までに洪兆麟の軍を徹底的に潰滅させ、揭陽、汕頭、潮州なる敵の主力軍の根拠地を奪取することである」と述べた。ブリュッヘルは三月七日に終った。チェレパーノフはこの戦いをふりかえって次のように回憶していた。「將軍たちは相変らず一番先に町や村を占領したがる。そこから利益を得るためである。ためにしばしば戦闘時における部隊間の連係が妨げられた。晋寧、揭陽、潮州の如き都市を占領した將軍は、直ちに徴税を任命して徴集を開始した。徴税の『英雄』たちは危険を覚悟で深く侵入した。かくてここに各部隊の指揮官の間に深い相互不信が生まれた」。徴税という名の略奪がこの第一次東征の間に見られたことをチェレパーノフは何度も言及している。『北伐戦史』や『革命軍第一次東征実戦記』などには見られない、リアルな描写である。チェレパーノフの記録は友軍の粵軍の行動の描写であって、わが黄埔軍は次の一例が示すように軍紀は極めて厳明であった。広九鉄道の沿線の敵を平定し、敵を追撃して淡水城に向かう途次、二月一二日龍岡附近でのであるが、『革命軍第一次東征実戦記』によれば「この地の人民はしばしば軍隊の害毒を受けてきたので、軍隊を甚だ敵視している」、したがって黄埔学生軍が「紀律を守り人民に対し極力親愛の情を示すが、人民はやはり畏れて近づこうとしない」。ところが淡水戦での黄埔軍の軍規の正しさを目のあたりに見た人民は「党軍の紀律は厳明で、百姓に愛護すら加える」と驚きの声をあげ、党軍が来ると知ると女子供までが出迎え歓迎したという。

潮汕戦で陳炯明自身が脱出して戦線を離脱した(三月七日のこと)。ソ連軍事顧問たちも実質的な東征は終ったと判断した。ワシリエフ、パロ、ニコリン、シュナイダーそしてチェレパーノフの軍校の顧問五人は、そのべてステパノフの許可をもらって掲陽から汕頭に遊びに出、ホテルの快適なベッドで心ゆくまで休み、のんびりと朝食を楽しんでいた。そこにブリュッヘルのスタッフのシャルフェイエフが緊張した顔つきで呼びに来た。すぐ駅に来て將軍に



逢えというのである。プラットフォームにはステパーノフがいらいしながら待っていた。特別列車の中からブリュッヘルは五人をジロリと不気嫌そうに一瞥、座席に五人を坐らせて言った。「戦争は終わったと／＼それどころではない。我々はまだ決定的な勝利を勝ちとっていない。内密な旅行なんぞで隊を離れるとは何事だ。（ステパーノフに向って）私の許可もないのに離隊を許すとは何事だ」。列車はいつの間にか発車して潮州に向かっていった。列車の中で將軍は全体的な軍事情況の分析、黃埔軍の任務などについて語り、最後に「二度とこんなことをしてはならぬ」と釘をさした。事実、戦争は終わったどころではなかった。それから数日後、孫文の死の翌日である三月一日、黃埔軍は棉湖で隊の興亡をかけて林虎軍と一大遭遇戦が行なわれたのであった。チェレバーノフは、三月二日陳炯明が汕頭から脱出し「實際は三月七日」、三月二日梅県を占領したことで第一次東征の目的は達成されたと述べている。捕獲された武器は、チェレバーノフによれば、一万三千丁ほどの銃、百十丁の機関銃、三〇門の旧式砲、六門の新式山砲、八百万発の実弾、千五百発の砲弾、三台の無線機などであった（この三分の一が黃埔軍にまわされた）。

第一次東征の勝因をチェレバーノフは次のように分析した。「まず第一に国民党と共産党の密接な共同作戦。これが為に孫文の革命政府は十分な兵力を獲得しえ、民族解放闘争における大衆の支持と保護を得られた。第二に黃埔軍校の教導第一団と第二団を基礎として形成された中国における新しい国民革命軍の抬頭。この軍隊が第一次東征の勝利の裡に完成するその決定的な役割を果たした」。国共合作による民族解放戦争、その中心的な担い手としての黃埔軍校を中核とする国民革命軍の抬頭にその勝利の原因を見ている。他方国民党側の公式見解は次の九点に勝利の原因を見ている。①党組織。中央党部から小組（細胞）に至る党組織が「管理の厳と団結の堅」をもたらしした。②政治訓練。政治部による政治知識と本党の主義の涵養、対外宣伝による民衆の本党への信頼。③党代表制。党代表と指揮官

の対立あるも、その「索制、激励」は戦いに効果あり。④軍隊の編成。三三制と特殊部隊（機関銃隊、偵察隊、通信隊等）はその有効性を發揮した。⑤連坐法。淡水の役で一連長が退却して処刑され、以後戦闘における退却はなくなる。⑥幹部の素質の優良さ。官兵は中国旧軍隊の悪習に染まらぬ者多く、しかも主義による陶冶があった。⑦武器精良、餉彈充足。⑧人民の協力。人民は軍隊をおそれるが、革命軍の「愛惜百姓」の口号と實際の一致に感じ入り、輸送、給養、通信、偵察などで大いに助けられた。⑨主義を實行して地を争わなかったこと。そしてこの九点の中で特に重要なものこそ②の政治訓練の力であったと述べている。

### (三) 回師靖乱あるいは削平楊劉

この戦いは一九二五年六月七日から一四日まで、広州市とその近傍で行なわれた。南方革命政府を支える三大軍閥（粵、桂、滇）のうち、广西・雲南の客軍を粵軍と黄埔軍が平定した戦いである。戦闘そのものはたった一日（一九二五年六月一三日の戦役）で桂滇六万の軍は壊滅するのであるが、その秘密は後に述べるように周倒な宣伝戦の勝利であった。しかしなぜ同盟軍と戦わなければならなかったのか。それを決意したのは一体誰か、いつか。

国民党の正史は次の如き楊劉の暴状をあげている。①楊希閔軍（左翼）と劉震寰軍（中路）は右翼軍（粵軍と黄埔軍）の苦戦の際に「按兵不動」、ただ軍事費のみを求めた。②林虎と密約して右翼軍の後路を断とうとした。③唐繼堯、段祺瑞と結び広州に割拠せんとした。この間の密電はすべて右翼軍が興寧の林虎の司令部から「搜獲」した。④孫文なきあと代理大元帥の胡漢民が彼らを説得せんとしたが無駄であった。以上を総合していえば「楊劉は均しく各々異心を懷き」、「反革命の陰謀を實行」せんとしたということになるようである。

しかし果してそうか。①④は確たる証拠となりうるか。ソ連軍事顧問のブリュッヘルらはしからばどう見ていた

か。それは極めて単純かつ明快な推論によっていたようだ。つまり、一九二五年四月初旬、革命政府の入手した情報によれば、雲南を支配する唐繼堯が広西を支配する楊と広西軍の劉、さらにイギリス、広州市の商団とが広東の革命政府打倒のクーデターに同意したとの情報、さらに四月二三日革命政府の西方を守る范石生軍が唐軍の攻撃を受けて南寧で敗北したとのニュースが入ったこと、この二つの「事実」からブリュッヘルはイギリス帝國主義・封建的軍閥・反動的ブルジョワジーによる革命政府への全面攻撃の開始とみた。しかし果してそれは三者の共同謀議による全面攻撃であるのか。

中国共産党の包惠僧の回想は国民党の公式見解ともソ連顧問団の見解とも違っている。そして恐らく包の見解の方が正しい。包は回憶して次のようにいう。都市に入った軍隊はトバク、アヘン、娼寮といった資本主義の害毒に染まり腐敗墮落していく。その中でも滇桂軍の腐敗が最もはなはだしく、それは滇軍幹部学校の如き若手將校再教育の場から始まり、楊希閔、劉震寰自身アヘン中毒で起床は毎日午後四、五時、ただ民衆から苛税を絞りとるだけである。包は以上のように述べ、楊劉討伐の真の狙いは次の点にあったという。曰く、「滇桂軍は横暴を横暴と思わぬ程に麻痺している。もし彼らが長く広州に居すわり、重税苛税の限りを尽し、腐敗墮落の限りを尽したならば人民はそれに耐えきれず、政府は何も出来ぬ。革命政府にはいかなる局面も開かれない。これこそ党軍が広州に戻り、楊劉を討伐した主要原因である。戦争が始まる前後、我々は楊希閔、劉震寰、趙成梁らが北京政府と結んで革命政府を転覆しようとしていると宣伝したが、そのような事があつたかどうか当時我々はいかなる真の証拠を持っていた訳ではなかった」と。包は（一九二五年）五月一四日、周恩来に代って代理政治部主任になっていた。包のこの回想は革命政府の真の意図を明らかにするものであろう。要するに第一次東征で実力を拡大した黄埔軍と粵軍が腐敗せる客軍の一掃

を突如敢行しようとしたのである。

楊劉という最大最強の客軍の解体という途方もない戦略を考案し実行に移したのはブリュッヘルであり、チエレパ  
ーノフはその間の事情を次のように生き生きと描き出している。一九二五年四月上旬、楊劉は唐繼堯、イギリス、商  
団と結んでのクーデターを謀らんとしているとの情報が入り、ついで四月二三日唐軍の范石生への攻撃のニュースが  
入った翌二四日、ブリュッヘルは廖仲愷と蔣介石をともしない汕頭に粵軍総司令の許崇智を訪ねることを決定した。四  
月二七日三人は汕頭に向かう船上で反乱軍への武力鎮圧を決定するのであるが、その決定の経緯は興味深い。蔣介石  
は全く悲観的で、「黄埔軍を汕頭に移し、唐が楊劉と仲たがいするのを待って軍事行動を起そう」とか「広州の無血  
降服」を主張した。それに対してブリュッヘルは「少しの間でも広州を失なうことは広州のみならず中国の革命運動  
に重大かつ取りかえしのつかぬ打撃を与えよう、しかも楊劉を打倒しうる兵力は十分ある」と強調した。廖仲愷はか  
ねてより財政統一の観点から客軍の一掃、軍権の統一を構想していて、無条件的にブリュッヘルの提案に賛成した。  
かくて介石もしぶしぶ同意し、攻撃は五月五日と決められた。見られる通り腐敗せる客軍の一掃という戦略はブリュ  
ッヘルにより提起され、ブリュッヘルの戦略に従って遂行されたということである（なおこの場合財政を担当する廖  
仲愷の支援が大きな意味をもっている）。そして特に留意すべきは、第一次東征が黄埔軍校生を中核とする校軍・党  
軍の恐るべき戦闘精神の發揮にあったとすれば、この対楊劉戦の特色はその宣伝戦の勝利にあったということであ  
る。以下ではまずこの戦闘の作戦計画の形成過程を中心に見ていこう。これはのちの国民革命軍の北伐の原型とみな  
しうる重要な特質なのである。

一九二五年五月一三日夜七時、汕頭の粵軍総司令部で許崇智を議長として軍事会議が開かれた。廖仲愷、朱培徳、

蔣介石、汪精衛、ブリュッヘルが出席した。會議は潮梅を放棄しても、全力もて革命の障害となる楊劉をのぞき、革命の根拠地を強固たらしめようとするブリュッヘルの基本方針が支配した。これは四月二七日にブリュッヘルが提案し、それがこの五月一三日の軍事會議で正式に採択されたのである。しかし會議の直後この重大な決定が外部にもれた。チェレパーノフによれば、五月半ばまで雲南軍、廣西軍はいたく友好的であったという。彼らは自分たち客軍平定の計画が着々と進行していることを夢にも考えなかったようなのである。

戰闘開始以前における楊劉軍と政府軍の配置は、包惠僧によれば次のようであった。「滇桂軍の大部分は廣州市に駐留している。趙成梁は北江に、廖行超は西関に、劉震寰は東関に、楊如軒・楊池生らは石龍・增城間に、楊希閔の總司令部は廣州の中心・八旗會館に、楊の主力たる六ヶの警衛団は市中の中心区である永漢馬路から廣九鐵道の沿線に分布していた」。その兵力は約三万、銃は二万五千丁と推定された。それに対し政府軍は「粵軍の精銳部隊は東征して汕頭にあるが、その外になお梁鴻楷の一師、張国楨の一師、許済らの三つの旅が西江に駐留し、李福林の軍は河南島に、譚の湘軍は北伐して韶関以北に、建国滇軍（朱培德軍兵力二千弱）と贛軍李明楊軍（兵力千弱）は北江に駐屯していた。さらに何成浚の鄂軍と程潜の攻鄂軍各々七、八百人が韶関附近に駐軍していた」。そして蔣介石の率いる黃埔軍は遠く潮梅にあった（この軍は五月二一日潮梅を出発、六月七日には廣九鐵道の樟木頭駅に到着している）。ブリュッヘルは楊劉軍は三万四千、政府軍四万七千のうち三万がこの戰闘に参加できるとみた。戰闘は六月一日か一二日と決められた。ブリュッヘルは五月一三日の會議で戰闘が廣州市を中心に行なわれることを予想し、まず司令部を河南島に置き、ここに作戰本部と幕僚・顧問を配置した。政府の各機關、中央銀行を黃埔島に移し、ここに胡漢民、汪精衛、廖仲愷、譚延闓（長州要塞司令）を配した。政府要人の關係者とその家族はホンコン、アモイ等に避

難させた。移転移動は五月一七日から二二日までかかった。かく後方を固めることがブリュッヘルの作戦の第一段階であった。彼の戦略の第二段階は宣伝戦の配置である。それも五月一三日の軍事会議で決定をみた。チエレーノフによれば、「唐繼堯を攻撃せよ」、「人民を圧迫する軍閥を打倒せよ」、「国民革命解放の大義への裏切者を打倒せよ」といったスローガンが採択され、次のような政治宣伝のプランが実行されることになった。①唐繼堯討伐の宣言文の発布、②直ちにポスター、ビラを印刷配布する、③国民党中央執行委員会を開き楊劉戦の意義を党員に説明する、④若い兵士を召集し軍の中で直ちに大衆運動を開始し、指揮官には宣伝の目的と方法を周知させる、⑤中執のメンバーを各会議や会合に派遣する、⑥韶関、惠州などの重要な都市や地方に宣伝員を派遣する、⑦直ちに警察署長を召集してその援助を得ること、⑧広州の労働者のゼネストを準備する。以上の諸方策は政府諸機関の河南、黄埔両島への撤退が終るのを待って実行に移されることになろう。その移転は五月二二日に完了した。そしてこの日から全広州は滇桂客軍が支配することになった。

楊希閔は自ら滇桂軍総司令と名のり、広州全市に戒厳令をしき、司令部を八旗会館においた。部下の周自得を広州市衛戍司令に、趙成梁を広東市長に任命した（六月四日のこと）。防禦線は瘦狗嶺と白雲山の間に敷いた。五月三日、対決は時間の問題となった。広州市民や役人たちはぞくぞくとホンコン、マカオに難を避けはじめた。

さて政治部は決戦を前にして、ブリュッヘルの基本戦略に沿い、労働者、広州市民、軍隊への政治宣伝活動にのりだした。それは李之龍（黄埔一期卒、共産党員）を隊長として、政治工作委員と軍校の学生を中心に「戦時宣伝隊」を作ったことである（六月四日のこと）。その組織は

①戦時宣伝隊は政治部に直属し政治部主任の指導を受ける

②戦時宣伝隊は隊長一人を設け（政治部主任が任命する）、全体の工作を管理指導する。

③戦時宣伝隊は幹事二、三人を設け、宣伝品を管理し、一切の雑務を処理する。

④戦時宣伝隊は暫くは五組に分け、各組の組長は本組の工作を指導管理する。各組では暫く宣伝員五人を置く。

この宣伝隊は六月六日には飛行機で空から一六種にわたる宣伝文を散布した。更に六月八日には特別宣伝隊も組織された。これは滇軍の各幹部学校、桂軍軍官学校の学生で旧軍閥を見かぎり革命の陣営に投じた者を以て組織された。彼ら両宣伝隊の活動は極めて広範にわたり、六月一二日党軍が広州市や付近の各県に潜入して地下工作員と連絡をつけ、スローガンをはり、ピラをまいて楊劉軍の罪惡をあばき、人民の決起をうながし、惡質な逃亡兵の略奪から市民を守った。かく労働者の支援を得て、水道、電気、電話も全てストップした。広州市民も悪行苛税を重ねる滇桂軍驅逐に参加し、銃を持つ者は銃をとって敵兵を狙撃した。武器なき者は棒をとって武器とし、老人も子供も喚声をあげて敵軍を威嚇したのであった。

六月一二日の戦闘は第三段階に当る。第一第二段階の総括、宣伝戦のいわば締め括りの実戦であった。六万余を誇る最大の客軍滇桂軍が一二日のたった一日の戦闘で壊滅し去ったのである。戦闘の詳細な描写は省略するが、広九、広三、粵漢の三鉄道に沿って広州市を全面包囲し、かつ省河から軍艦の砲撃を受け趙成梁が爆死すると、軍心は一挙に動揺し壊滅するに至った。楊劉は沙面に逃げこみ、捕虜は二万人に及んだ。ここに南方政府最大のガン滇桂軍は崩壊し、唐繼堯も滇桂辺境に撤退した。この戦いは戦闘開始以前にまず宣伝の勝利があった。軍事の勝利というより「政治の勝利」、「武力と民衆の結合」の勝利であった。これはまさにブリュッヘルの指導力とソ連赤軍に学んだ政治

工作の勝利のたまものにはかならなかった。ところで第一次東征から回師靖乱まで（つまり一九二五年六月一四日ころまで）の間に、チェレパノフ、アキモバの回想には新しいソ連軍事顧問の名前が登場する。いま重複をいとわず列挙しよう。イタリックで書かれた者が新に加わった顧問である。

工兵顧問として *Y.A. Yakovlev*, *M.Y. Gmira*, 黄埔軍の顧問として *N.G. Vassilyev*, *Pallo*, *Nikulin*, *Beshastnov*, *Shneider*, *A.I. Cherepanov*, 連絡 *liaison* 顧問として *M.I. Draitun*, フリッツァーの副官も兼ねる顧問の *Shalfeyev* (*Vorobyov*), 砲術顧問の *G. Gilev*, 海軍顧問の *Smirnov-Svetlovsky*, 朱培徳の顧問の *F. Matseilik*, 蔣介石の顧問 *Stepanov*, 張明達（張明達）の顧問の *Sakhnovsky*, *Wang Pinghu* (?) の顧問 *Rogachev*, そしてブリュッヘル自身は粵軍総司令許崇智の顧問もつとめた。そのほか空軍関係で、パイロット、ナヴィゲーターとある *V. Sergeyev*, *A. Kravtsov*, *K. Pakov*, *O. Brazeman*, *J. Talberg*, *Aviation mechanic* の *Kobyakov* の六人の名前が出てくる。新出の顧問はこの六人を含めて全一二名である。すでにバラーフスキー号で到着した九名、それ以前に到着していた一〇名を加えると、この時点で軍事顧問団は全三〇名ほどであろう（但しこの新しい顧問一二名がいつ広州入りしたか明らかではない）。ブリュッヘルは指令命令は通常直ちにその場で中国語に訳された。しかし通訳がいなるときブリュッヘルは命令をロシア語で書き、各軍の顧問たちに渡され、そこで中国語に翻訳されて中国人指令官に伝達された。顧問が主要な將軍たちに配属されたのは顧問としての役割もさることながら、ブリュッヘルの命令の徹底化をはかる意味で必要欠くべからざる措置であったようだ。ともあれ三〇名を越すソ連軍事顧問団が、遙かなる雪国からここ広州の明るい太陽の下で、名將ブリュッヘルの指揮下中国革命のために挺身していたのである。この楊劉戦ののち、南方革命政府は次第に黄埔軍校と黄埔軍を中心にその軍事力を増強し、ソ連軍事顧問の数もなお増大していくが、廖仲愷の暗殺



(一九二五年八月)、第二次東征(一九二五年九月〜一〇月)、国民党と共産党の衝突の激化、中山艦事件(一九二六年三月)となお紆余曲折を経ることになる。これについては稿を改めて述べることになろう。

註 紙幅節約のためいくつかの項にわたるものも一括して一つの註にまとめた。

- (1) 以下の叙述は拙稿「黄埔軍校の設立過程とソ連」中哲文学会報第六号(一九八一年)参照。ソ連大使館返還については Wilbur and How, Documents on Communism, Nationalism, and Soviet Advisers in China 1918-1927, Octagon Books, N.Y., 1972, pp. 153-4. バラチーニンの国民党改組については『中国革命とソ連の顧問たち』毛里・本庄共訳、日本国際問題研究所、一九七七年、三八頁以下。D. Jacobs, Borodin-Stalin's Man in China, Harvard U.P., 1980.
- (2) 孫文との会見の模様については A.I. Cherepanov, As Military Adviser in China, Progress Publishers, Moscow, 1982, p. 70. 顧問たちのほりきりぶりは同上書八五頁、チェレバーノフの経歴は同上書一六頁、中国語も英語も不得意は同書の八四頁。
- (3) 四人の顧問と王柏齡・蔣介石については「黄埔軍校開創之回憶」(一)、伝記文学第一五卷第六期(これは中華民国史料研究中心『中国国民党第一次全国代表大会史料專輯』民国史研究叢書之七、一九八四年に再録されている)。
- (4) 軍校におけるソ連顧問については、チェレバーノフ前掲書八四頁。
- (5) バヴロフについてはチェレバーノフ前掲書八九〜九四頁。Vera Akinva, Two Years in Revolutionary China 1925-1927, Harvard East Asian Monographs, 1971, p. 159. C.M. Wilbur, The Nationalist Revolution in China 1923-1928, Cambridge U.P., 1983, p. 14. バヴロフの演説は『黄埔叢書』第二集『精神教育』所収。トロツキーと赤軍、コミサールについては、A・ドイッチャー『武装せる予言者 トロツキー』新潮社、一九七七年、四三五〜六頁。ソ連科学アカデミー歴史研究所『ポリシエヴィキの軍隊工作』恒文社、一九七五年、三五七頁。トロツキー『革命はいかに武装されたか』現代思想社、一九七〇年。
- (6) 軍事委員とバヴロフのプログラムについてはチェレバーノフ上掲書九〇〜九一頁。
- (7) 李劍農『最近三十年中国政治史』台湾学生書局、一九七四年、五七三頁。
- (8) チェレバーノフ上掲書九二頁。六人の顧問については同九四頁。Uger (Remi) は空軍顧問(ソ連のプレゼント中山機一

機あり)。Chubareva (Sakhovskaya) はフルンゼ軍校卒の唯一の女性、Sakhovsky (同じく顧問) の妻で二児の母、黄埔で教える。アキモヴァ上掲書一四九、一八一頁などみよ。ソ連式教育の導入についてはチェレバーノフ上掲書八六頁。

- (9) バヴロフの死、孫文の弔電はチェレバーノフ上掲書九三—九四頁と A.V. Blagodatov『論中国革命的演変 一九二五—二七』王啓中訳、台湾国防部情報局、一九七九年、一三五頁。毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』龍門書店、一九六五年、二九二頁。

- (10) これについては『黄埔建军三十年概述』が標準的、その外『中央陸軍軍官学校史稿』、『陸軍軍官学校史』の正史が台湾から出ている。

- (11) 兵の募集については陳果夫「建军史之一頁」(呉相湘『陳果夫的一生』伝記文学出版社、一九七一年)、毛思誠上掲書二九〇、三二二、三三四頁。

- (12) 教導団の編成については『黄埔军校史料(一九二四—一九二七)』広東人民出版社、一九八三年、九五頁。『国軍政工史稿』(上)国防部総政治部、一九六〇年、一三六—七頁。『棉湖戦役四十周年記念特刊』棉湖戦役四十周年記念籌備委員会編、一九六五年、二六、五六、六八、七五頁の回憶参照。

- (13) これについては毛思誠上掲書三一〇頁。王柏齡の回憶。Wilbur 上掲書(註(5))。『第一次国共合作時期的黄埔军校』文史資料出版社、一九八四年、二五七頁(宋希濂の回想)。

- (14) 商団事件と黄埔生との関係については、チェレバーノフ、『包惠僧回憶録』人民出版社、一九八三年、一六一—一六四頁。『吳鉄城先生回憶録』線装本七四頁。政府軍の略奪については商団側の香港華字日報が一九二四年冬に発行した『広東扣械潮』の巻一の九七、一〇二頁など参照。韶関の第一隊については『第一次国共合作時期的黄埔军校』所収の宋希濂の回憶二五三—五五頁、徐向前の回憶二一九頁。

- (15) Букчинкелтунгундз А. N. Kartunova, Blucher in China, in Soviet Volunteers in China 1925-1945, Progress Publishers, 1980, pp. 52-53. 『中国革命とソ連の顧問たち』所収の同じカルトゥノヴァのブリュッヘル論を見よ(両論文、異同はあるも大筋は同じ)。またチェレバーノフの回想録上掲書一〇一、一〇四頁以下。

- (17) 『国父年譜』七〇二頁。ブルュッヘル北伐反対論は邦文カルトゥノヴァ論文六八—六九頁。

- (18) 孫文の二つの演説は『国父全集』中国国民党中央委员会党史委员会編、第二冊。一月四日の指令は第四冊をみよ。孫文

北上の様様、最後の軍校視察は『国父年譜』参照。

(18) 黄埔期における周恩来については許芥昱『周恩来』高山林太郎訳、刀江書院、一九七一年。司馬長風『周恩来』竹内実訳、太平出版社、一九七五年。『広東文史資料』第二二集、一九七八年。『現代史料』第一集、第二集、第三集。『黄埔軍校建校六十周年記念冊一九二四—一九八四』黄埔同学会編、香港建義利有限公司、一九八四年、四八頁。蘇叔陽『人間周恩来』竹内実訳、サイマル出版会、一九八二年。

(19) 小山弘健『軍事思想の研究』新泉社、一九七七年、四一頁。『ナボレオン言行録』大塚幸男訳、岩波文庫、一九八三年、二七〇頁。戴伝賢の党代表制論は『戴季陶先生政治工作論文』政治訓練部編印、一九二八年所収の「党代表制度好不好」。

(20) 佐々木の見解は『南方革命勢力の実相と其の批判』大阪屋号書店、一九二七年、一九—二七頁。なおコミサール制は元来傭兵を監督し給与を配慮する君主側の役人であった。石川澄雄『シュタインと市民社会』御茶の水書房、一九七二年、五二、六一頁を見よ。劉文島の回憶と介石の訓詞は『国軍政工史稿』(上)の九九、一三七—四〇頁。

(21) 中国の兵士についてはジェローム・チェン『軍神政權』北村稔他訳、岩波書店、一九八四年の第六章。ジョナサン・スペンス『中国を変えた西洋人顧問』三石善吉訳、講談社、一九七五年、三二八頁。

(22) 蒋介石の三度にわたる連坐法への言及はいずれも『黄埔叢書』の第一集『精神教育』一八一、一八四、二五九頁。

(23) 介石の三度にわたる連坐法への言及はいずれも『黄埔叢書』第一集『精神教育』一七一、一九三、二五七頁。革命軍連坐法は『黄埔叢書』第三集『増補曾胡兵語録』の附録および毛思誠上掲書三六三頁。威繼光の著に『紀效新書』一八卷、『位戎要略』一卷、同『練兵実紀』九卷、『雜集』六卷がある。竹内実『現代中国への視角—黄埔軍官学校のこと—』思想一九七七年五、六月もみよ。

(24) 以下の第一次東征、回師靖乱についてはすでにあげた『包惠僧回憶録』、『国軍政工史稿』、毛思誠、チェレバーノフ、アキモワの回想、『第一次国共合作時期的黄埔軍校』、『中国革命とソ連の顧問たち』、『黄埔軍校史料』などのほか、『周士第回憶錄』(人民出版社 一九七九年)、鄧文儀『黄埔精神』(黎明文化事業公司 一九七六年)、国防部史政局編『北伐簡史』(正中書局)、国防部史政局編『北伐戦史』(中華大典編印会、一九六七年、第二冊)。